

FD

report

Faculty Development

2020.3 Vol.13

同志社女子大学

FDレポート 第13号 2020.3

CONTENTS

◆ 巻頭言 ◆

『FDレポート』第13号の刊行によせて 学長 飯田毅 ◆ 1

◆ 2019年度FD講習会 ◆

講演「授業改善につながるルーブリック評価の意義と実践」
..... 大阪成蹊大学教育学部 准教授 赤沢真世 ◆ 2

◆ アクティブ・ラーニング研究会 ◆

第12回「アクティブ・ラーニングの必要性・その種類・可能性」
..... 教育開発支援センター長 若本夏美
日本語日本文学科 大島中正、食物栄養科学科 神田知子 ◆ 12

◆ 教育開発実践報告 ◆

「学芸学部FD活動報告」
..... 学芸学部長 中村信博 ◆ 17

「〈継続は力なり〉～現代社会学部のFD活動」
..... 現代社会学部長 松崎正治 ◆ 18

「薬学部における問題解決能力醸成のためのルーブリック導入と運用」
..... 薬学部長 芝田信人 ◆ 19

「看護基礎教育のこれからを考える」 看護学部長 岡山寧子 ◆ 21

「短いとうれしい(?)—30分レクチャー・シリーズ—」
..... 表象文化学部英語英文学科主任 風間末起子 ◆ 21

「縦のつながりを育て、学びの見通しをつける」
..... 表象文化学部日本語日本文学科主任 森山由紀子 ◆ 22

「『食品加工・物性学実験』におけるアクティブ・ラーニング」
..... 生活科学部教授 山本寿 ◆ 22

◆ 授業に関するアンケート ◆

「2019年度春学期 授業に関するアンケート総評」
..... 教育開発支援センター長 若本夏美 ◆ 24

◆ ラーニング・commons 利用報告 ◆ ◆ 41

◆ FD活動報告(2019年度) ◆ ◆ 48



◆巻頭言◆

『FD レポート』 第13号の刊行によせて

改めて FD (Faculty Development) の意味を考える

学長 飯田 毅

大学関係者でFDという言葉を知らない人はいないでしょう。しかし、その意味を正確に理解している人はあまり多くはないように思われます。かつて、FDは大学教員の授業改善や教育方法の改革を指す言葉であると理解された時期がありました。特に、アメリカの教育事情を知る識者は、その意味の狭さを指摘していました。私自身もなぜFDを授業研究と呼ばないのか戸惑ったことがありました。

FDを理解するための鍵はfacultyという言葉の本来の意味を探ることにあります。facultyの原義は「何かを容易にさせる力」にあります。そこから、力を出せる分野、力を出せる分野としての学部、そして教授陣へと意味が拡大して来ました。「何かを容易にさせる力」は、人に本来備わっている身体的・精神的能力に加えて経験によって獲得された「特殊な能力」をも意味します。このようなことから、FDは学部・教授陣としての必要な能力を開発し、発展させる意味になります。したがって、FDは授業や教育方法の改善の狭い意味だけではなく、現在は将来の大学教員である大学院生を対象としたFD、学生を参加させるFD、IR (Institutional Research) と関連付けて実施するFDをも含まれるのです。つまり、FDとは大学教員の果たすべき4つの職務である教育・研究・学務(大学運営)・社会貢献に関連する能力開発であると捉えることができます。

しかし、大学教員の能力開発の中で教育方法の改善は重要な部分を担っており、日本にはその伝統があります。特に、日本では教育方法の改善は高等教育より初等中等教育において盛んです。その代表的な一つの例として研究授業があります。本学でもかつて公開授業という名前で各学部学科の代表者が授業を公開し、他の教員が参観するというFDを実施したことがあります。日本の小中学校の指導法研修会では、研究授業によって各自の指導法の改善を目指します。研究授業では、ある目的のために自分自身の授業を学内や学外の教員に公開し、その後、授業者と参加者が授業の目的や指導方法について検討します。私自身この方法を用いて指導技術を磨いてきました。また、新井紀子氏によれば、日本の小学校の班グループ活動が「アクティブ・ラーニング」の原型であり、逆輸入された(「AIに負けない子どもを育てる」)としています。このように日本の初等中等教育には独自文化として授業研究の歴史があり、教育改革を支えているのです。そのため、大学にFDが導入された初期の頃は、FDが教育方法改善と結びつきやすかったのではないのでしょうか。

学生の興味・関心を喚起し、学生自身を深い学びに導くためには授業方法や技術そのものだけでなく、研究で得られた知識、研究を通して得られた精神的側面を踏まえた技能、カリキュラム、成績評価とフィードバック、ティーチング・ロードの設定や管理など大学教育改革全体に関わっています。FDはこのように幅広い分野に渡っています。

本年度のFD講習会は「授業改善につなげるルーブリック評価の意義と実践」という演題で大阪成蹊大学の赤沢真世先生に講演していただきました。また、実際に学生のレポートを読み、評価を考えながらルーブリックを作るという作業をグループで行いました。現在、本学では教務部や教育開発支援センターを中心として、ルーブリック評価の導入を目指しています。本年度のFDは、FDのカテゴリーから考えると、教育方法改善、特に評価方法の改善であると捉えることができます。その方法の特徴は本学の教員が一堂に集まり、学部学科を越えた教員同士で意見を出し合うことで、協働してルーブリックを試作するというプロセスにあると思います。そして、このような取り組みこそがFDの一つの側面である「大学教員としての専門職の技能をリフレクション(省察)に基づいて向上させる」ことであると実感しました。

◆2019年度 FD 講習会◆

日時：2019年10月16日（水）16：00～17：45
 場所：京田辺キャンパス 知徳館 C464教室
 司会：若本夏美 教育開発支援センター長

- | | |
|-----------|---|
| 1 開会挨拶 | 若本 夏美 教育開発支援センター長 |
| 2 講演 | 「授業改善につながるルーブリック評価の意義と実践」
赤沢 真世 氏 大阪成蹊大学教育学部 |
| 3 グループワーク | |
| 4 閉会挨拶 | 飯田 毅 学長 |

講演「授業改善につながるルーブリック評価の意義と実践」

大阪成蹊大学教育学部准教授 赤沢真世

はじめに

こんにちは。大阪成蹊大学の赤沢と申します。若本先生のあのよう高めていただける言葉をいただくと、かえって恐縮して、冷や汗がかなり出てきます。今日は諸先輩方も多数いらっしゃる中ですが、僭越ながら講師を務めさせていただけたらと思っています。私の研究室の先輩方が評価の研究をしており、その流れの中でパフォーマンス評価、特に小中高の英語科のパフォーマンス評価の取り組みなどを現場と一緒に進めております。ただ、現場の中でもそれほど浸透しているわけでもなく、なかなか難しいというところですので、今日の「ルーブリックをつくってみよう」というワークも、「なかなか難しいね」という意見がたくさん出ると思います。ただ、その中で、このようなことをする意味がやはりあるのではないかと、このような議論がやはり必要なのではないかというように、議論の中身自体が日々の授業改善に役立つ大事なポイントになるかとも思っておりますので、ぜひ、いろいろなご意見をグループの中で出し合っただけいただけたらと思っています。最初の20分ぐらいでは、昨年度公演された松下佳代先生からしっかりとした理論化されたお話があったかと思うので、私の方からは、マイルドな形でわかりやすくお話ができればいいと思っています。

大学におけるアクティブ・ラーニングへの注目

まず、私も、授業をしていまして、あるいは大学のFDで同じような話をしたときに、まず「知識の“網羅”を目指す学習でよいのか？」ということのを特に考えます。「特に講義科目では、たくさん教えたいことがあるんです。アクティブ・ラーニングをしている時間はないんです」と言われるのです。ただ、一方で、「そのような知識をたくさん教えることに、本当に意味があるのか」「教えたつもりになっていて、学生が本当に身につけているのか」という視点で見ると、やはり教師が一方的に、教えたつもりになっているということもあるのではないかと、思います。もう一つは、「活動をいっぱいやっています」という先生もいらっしゃいます。授業を見に行かせていただくと、学生がすごく動いているのです。しかし、感想を見ると「今日は発表できてよかったです」「活動は、ゲームがたくさんあって楽しかったです」というような、「一体、何を学んだのかな」という振り返りもあつたりします。このように、活動が目的化されてしまい、本当に学ぶことができているということも、一方ではあるかと思っています。頭の中も実際に活動的になりながらも、本当に学んでほしいことを学生が学べるような授業をつくっていかねばならないことが、アクティブ・ラーニングの注目された背景にあるかと思っています。

もう一つ、大学でのアクティブ・ラーニングが推進されてきた背景としては、今の流れと同じで、まず、国として大学の卒業までにつけたい力、学士力という言葉で以下のようなキーワードが出されてきたということが「①学士力」とスライドに記載してあります。今までの知識、理解を教えて終わりではなくて、小中高も一緒ですが、それを使いながら、汎用的な技能や、実際に学びをみずから進めていくような態度、そして、幅広いいろいろな学習経験と想像していく力、思考力が求められてきています。そして、実際にそのような授業ができているのかということ突きつけられてきました。

「②高等教育のユニバーサル化」については、なかなか厳しい学生もおります。「そもそも何のために大学に入ってきたの」と言いたくなるような態度の学生もおります。このような状況で学習意欲があまり芳しくないという目

的意識の低い学生に対して、でも、そこを「しようがないな」ではなくて、目的意識を持たせて「どうなりたいの」というゴールの姿を意識させて高めていくことが求められてきていると思います。特に「自分事として学習を捉えて、自分で見通しを持ってゴールを設定して自ら学べる」学生をつくっていかないといけない。これが非常に大きな課題だと思っています。

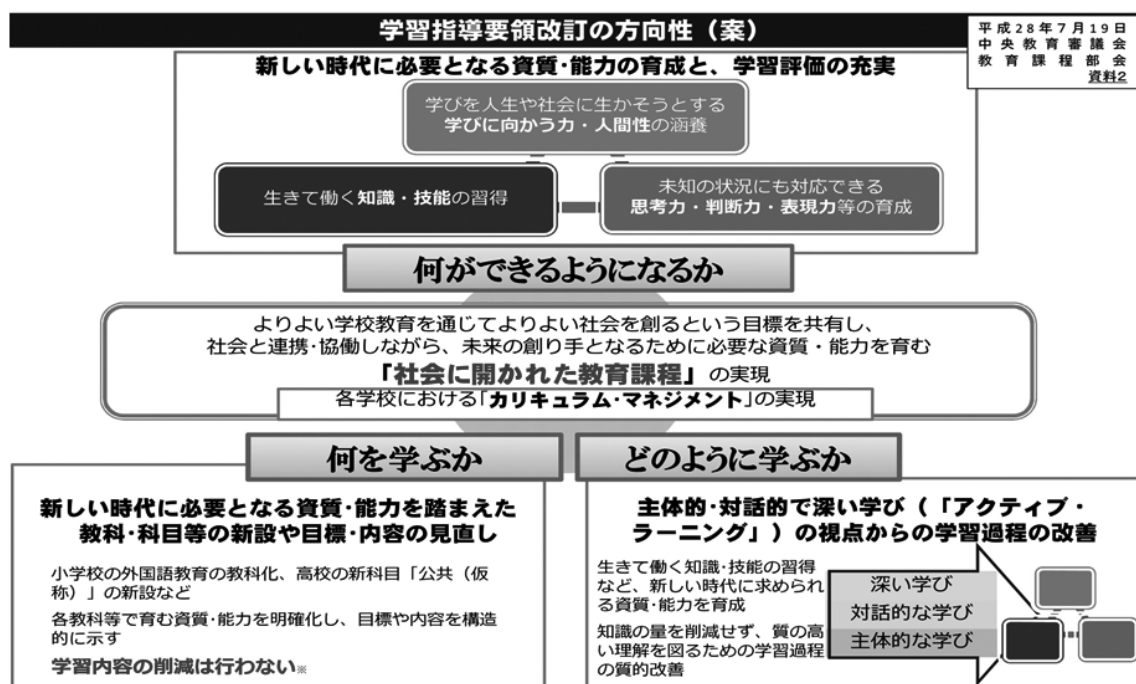
アクティブ・ラーニング議論の広がり

このようなアクティブ・ラーニングの議論は、元々は高等教育、大学の教育から広がってきたのですが、新しい学習指導要領、小学校は2020年、来年度から始められますが、小中高でも同じような方針が立っています。このスライドは、よく小中高の先生方の研修などでは見飽きるほど出されるような、文部科学省によるスライドですが、大事なことが3点あります。まず一番上の「何ができるようになるか」が、とても大事なキーワードになっています。実際に学習したときに、学習者がその授業を通して何ができるようになったのか、そこをしっかりと考えてほしいということです。教えたつもりになっているのではなくて、実際に生徒あるいは学生が、その授業が終わったときに本当に何ができるようになったらいいのか、まずはそこをしっかりと考えてほしいということです。逆を言うと、今まではそれができていなかったのではないかとということです。教えたから、きっとこれができるようになっていけると思うけれども、例えば発表する力も、発表というものを「こういうふうにやったらいいよ」と教えるだけで、実際にやらせていなければ、できませんね。そのため、実際に教えた上で本当にできるようになっているのか、そこまできちんと見ておいてほしいということなのです。

そのときに、まず「何ができるようになってほしいのか」ということを設定して授業を組んでいこうとすると、今まで、教えていた中身はたくさんあるけれども、本当にこれは必要があったのかということも見えてくるかもしれません。今まで教えていたこと、学習者からしたら何を学んできたのかという中身、学ぶ中身に対して、本当にできるようになってほしいという目標に照らして実際に必要があるものなのかどうかを、もう1回検討、吟味をしてみてほしいということが、この二つめです。そして、実際に発表ができるようになって、自分の意見をみずから表現することができるようになってほしいという目標を立てたときに、実際にやはり授業の中でその機会を設定しなければ、育っていきません。そこで、授業のあり方そのものを、学び方そのものをも改善していかないといけないのではないかとということで、出てきたものがアクティブ・ラーニングだと書かれています。

小中高では、アクティブ・ラーニングという片仮名をよりわかりやすくするために、「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」というような、三つの日本語になっています。主体的とは、自らが学びに対して向かうという学びですね。対話的とは、例えば友達同士、あるいは、友達という人だけではなくて、過去の他の人、先輩の考え方というものも含めて、対話をしながら学んでいくことも入っていますが、このようなことを通して、より深く学

小・中・高でも学習指導要領改訂の主軸



んでいこうということが目指されています。このような深い学びのところで、また同じ、常に同じキーワードが出ています。大学の学士力とも同じです。つまり、今までは、知識、技能という基本的なことはしっかりとやってきたかもしれないけれども、それを本当に深めて実際に思考をして、自分で判断して、そして自分の言葉で表現するという力が身についているのか、ここまでしっかり育てたい。そして、その土台にもなったり、その学びの先に位置づくものにもなりますが、実際に自分の学びとして捉えて、次のゴールに向かって、さらに学びを進めていく、深めていくような力、これ全体を育てていきましょと、さらに強く言われています。このような流れは今、大学だけではなく小中高もありますということで、今、まさしくどの学校階梯でも授業を変えていかないといけない、このような力をつけるために一丸となって進めていかなければならないということが少し見えてくるかと思えます。

一番、私が大切だと思っていることがこのキーワードです。つまり、「教授から学習への転換」です。すなわち本当に、教えたつもりになっているのです。今日も教育実習の巡回に行ってきたのですが、学生の反省を聞くと「やっぱり教えたつもりになっている」「授業が終わったときは100点満点中、今日は80点いけたんちゃうかと思ってたんですけど、子どもたちのノートを見たら、全然わかっていないな」と。「ポイントとして言ったつもりだけど、全然できていないと感じて、ああ、私は授業力がないんだなと思いました。もう無理です」と言っていたのですが、そこで私は「いやいや、私も一緒だよ。だから、大学でも、みんな毎回、毎回、振り返りを書いてもらって、それを読んで、コメントをつけて、次の時間返してフォローしてるでしょ」と言いました。「次の時間までを含めて、もう1回学び直しの時間になっているから、次の時間の最初、もう1回フォローしてね」と言いました。大事なことは、やはり教えたつもりではなくて、本当に何を学んでいるのかということを見取って、実際に学びにつなげていく。そのために授業をしていかなければならないと思っています。

求められる資質・能力の多様性

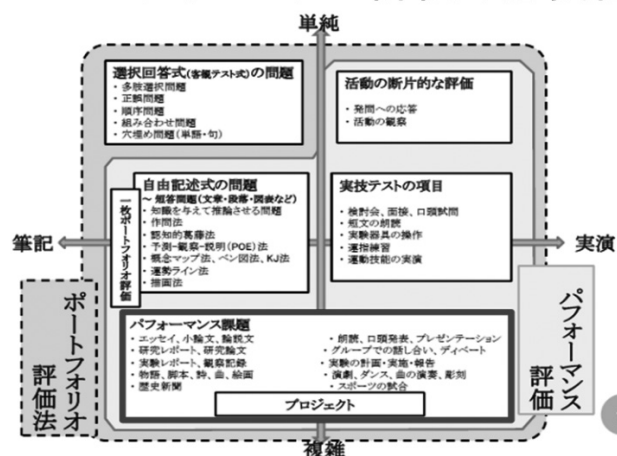
今度は評価の話になりますが、そのような力をつけたいと思って授業をすることはもちろんですが、実際に、本当に力がついているのかを見るものが評価になります。今までは、とすると、私の授業でもそうでしたが、テストをして終わりということがありました。教育課程論でも、最後はテスト、80%テストとしていたときもありました。しかし、そうすると、テストで測れるものしか見られないのです。記述式のテストももちろん入れましたが、それでもその時間内に、今、脳内にある知識を使いながらでしか解けないなど、やはり限られた力しか測れないと思っています。今、求められている力は、単純なテストで測れるような知識、理解の部分だけではなくて、「エッセイを書かせる」「研究レポートを書かせる」「プレゼンテーションをさせる」など、いろいろな知識や、理解したこと、あるいは技能を総合的に使って発揮するような力が求められているのであれば、そのような力を実際に使う課題を出して、そこで評価していかないといけないということになります。

では、どのようにして評価するのかということになります。なかなか難しいです。「どんなプレゼンテーションがA評価になるんだろうか」と考えたり、「どんなレポートだったら、Aを出せるかな」ということは、学生のレポートを見ている間にも変わっていったりもしますね。最初のレポートは「とりあえずBぐらいにしておこう」、それで何人か見ていたら、「いや、さっきのよりはできているから、Aにしておこう」、途中でAよりもっといいものがあれば、「あ、どうしよう。さっきのやつもBプラスに変えようかな」というようなことがあると思います。そのあたりの評価を少し客観的にできないか、あるいは、先生方の中で評価の基準をある程度そろえられないかというところで出てくるものが、ルーブリックという考え方になります。

ルーブリックの表について

ここまでのお話は、もう知っていらっしゃる先生方もたくさんいらっしゃると思いますし、小中学校、あるいは高校が使っているルーブリックの例も見せながら、雰囲気といいますか、このようなものののだなということを見ていただけたらと思っています。

求められる資質・能力の多様性 ⇒パフォーマンス評価の必要性



(西岡加名恵・田中耕治編著『活用する力』を育てる授業と評価・中学校』学事出版、2009年、p.9参照)

ループリックとは、こちらの次のスライドにあります、縦軸と横軸が逆の場合もあるのですが、このような表の事です。一つのパフォーマンス課題、例えば何かを発表する、プレゼンテーションをするといったときに、プレゼンテーションで大事にされる観点は幾つかあると思います。例えば、発表の技術、あるいは中身というように、幾つかの観点に分かれます。「3」はよいという意味ですが、大事なことは、この観点で「最もすぐれた姿というのはこういうものだよ」という具体的な姿を示すことです。そして合格点が「2」になるのですが、「合格点として挙げられるのはこういう姿」ということ、そして「そこに到達していない姿というのは1になる」という具体的な姿を、各観点別に書いたものをループリックと呼んでいます。日本語の定義では、「レベルの目安を数段階に分けて記述して、学生の達成度を判断する基準を示すもの」となります。ある課題を幾つかの構成要素—発表の技術と内容でもいいと思います—に分けて、その要素ごとに評価基準を満たすレベルについて具体的な姿として書いたものです。通常、このような表になります。

もう少し具体的に見ていくと、例えば、高校生の英語のプレゼンテーションの発表などでは、どのような項目が立ちそうか、そして良いと思う姿はどのような姿かと思ったときに、例えば、「アイコンタクトができていいる」、「ぼそぼそしゃべるのではなく、とてもクリアに話すことができていいる」、あるいは、英語なので「英語らしい発音になっている」というところを見たいという先生もいると思います。あとは、「中身」、Contents and Structureです。そして、それぞれの項目で、「よくできた姿だな。すごいな」と思える具体的な姿はどのような姿かを考えていきます。それを「5」や「A」などと考えていくと、先生がモデルとして示している姿やモデルとして感じている姿が、全部「5」のところに並ぶようなイメージです。京都府立園部高校は、ここは京都の中でも最初に英語でパフォーマンス評価をやっていたところですが、例えば、「私が紹介したい人」を発表するときのループリックが例に示したスライドです。

次の表と横に並ぶ形で、今回二つに分割して掲示してしまったので少し見づらいなのですが、もともとは横に並ぶ形となっています。すなわち観点としては、最初は attitude and eye contact と書いてあります。次が voice です。次が pronunciation です。もう一つが、先ほどの Contents and Structure です。縦と横、縦軸と横軸が逆ですが、5のところを見てもらうと、一番いい姿が書かれています。具体的な言葉で書かれているのがわかると思います。例えば、pronunciation のところを見てもらうと、作成された先生は、どのような発音がきちんとできていればいいかということまで、具体的に書きたかったのがわかります。その次ですが、内容についても、「具体的に何を紹介できているか」ということについて、「なぜ、自分がその人物を紹介したいのかという理由」「複文構造が使えている」「発表が魅力的である」と書いてあります。このように、具体的な姿がある程度見えるような評価の基準表がループリックというわけです。

続いてのループリックサンプルは、小学校の外国語活動、今は教科「外国語」科での活動を意図して、5、6年生でやっているものの例です。とても小さくて、すみません。こちらの次の方も同じなので、見やすい方を見ていただけたらと思うのですが、まず、どのようなパフォーマンス課題をやっているかといいますと、上のところに書いてあります。「交流プログラムで出会う海外の小学生に、自分が伝えたいと考える日本の文化を発表しよう」ということです。大きく分け

基本的なループリックの表

表題・課題

	評価尺度 1	評価尺度 2	評価尺度 3
観点1			
観点2			
観点3			

縦軸・横軸は逆の場合もある

- ・通常、表のかたちで示され、判定結果を丸で囲うようにして採点する。
- ・評価基準は3～5段階程度が一般的である。

例：高校（英語科）の実践（京都府立園部高校）

表4-7 「私が紹介したい人」ループリック 観点（分けなくても可）

	Attitude Eye contact	Voice	Pronunciation
5	大家よく目が合う。 大変よく伝えようとしている。 Actual very good eye contact.	非常によく聞こえる。 You can hear the presenter very well.	th, f, v, m, n, r, l, b, p, k, t の子音の発音がほぼ完璧である。 Consonants are perfect.
4	聴衆を見て発表しようとする意図が感じられる。 It seems that the presenter is making efforts to deliver.		発音はほぼ完璧である。 Consonants are perfect.
3	発表しているのだが、あまり聴衆と目が合わない。 It is a little bit difficult to hear.		In KATAKANA pronunciation.
2	No eye contact.	You can hear if you try.	
1	Not willing to deliver.	Unheard.	
	× 5 =	× 5 =	× 5 =

Evaluation Sheet / 100

Contents and English Structure	
●紹介したい人物の内容を具体的に紹介している。 (誰?何をしている?)	●複文構造が使えている。●発表が魅力的である。
●なぜ自分がその人物を紹介したいのか具体的に述べている。 Clear and concrete explanation about the person- Who? What is he/she doing? Clear and concrete reason why they want to introduce that person. Contents are expressed in not only simple structures but also complex structures. The presentation is great.	
●紹介したい人物の内容を具体的に紹介している。 (誰?何をしている?)	●複文構造が使えている。
●なぜ自分がその人物を紹介したいのか具体的に述べている。 Clear and concrete explanation about the photo- Who? What is he/she doing? Clear and concrete reason why they want to introduce that person.	
Contents are expressed in not only simple structures but also complex structures.	
●人物の内容を具体的に紹介している。 (何?いつ?どこで?何をしている?)	
●なぜ自分がその人物を紹介したいのか簡潔に述べている。 Some explanation about the person- Who? What is he/she doing?	
Some reason why they want to introduce that person.	
●人物の内容を紹介している。Some explanation about the person- Who?	
	× 5 =

Total / 100

て、観点、内容、中身と発表の態度的な部分です。見ていただくと、合格点が「2」です。真ん中が合格点です。その上の「A」の「3」になるために何がつけ加わっているかを見ていくと、その差が見えるかと思っています。

まず、「2」のところを見ていただきます。赤字の部分の「内容」のところ。「日本文化についての説明や感想を伝える」、「形容詞をきちんと選んで発表できている」というところです。それがさらに「3」「A」の姿になると、形容詞というのは、It's nice. や It's beautiful. など、そのように簡単な形容詞（本時で学習するもの）にプラスして、今まで習ったことのある単語や文をつけ足して、自分自身がより伝えたいことを入れているかという中身になるのです。同じように発表の英語らしさ、発表の積極性も、「2」が合格点で、最後まで話すことができたなら「2」です。ただ、それにプラスして、話の区切れごとに相手の理解を確認するような、すなわち「OK？」などでもいいので、このような表現が加えられていることが、次の段階「3」になると分かりやすく示されています。

例：小学校外国語の実践 交流プログラムで出会う海外の小学生に 自分が伝えたいと考える日本の文化を発表しよう

表3 「日本文化を紹介しよう」発表のルーブリック（泉ら、2018 をもとに筆者が整理）

	内容	発表		
		英語らしさ（流暢に話す・文のまとまり）※1	発表の積極性	
とくに褒めたい姿	3	日本文化についての説明や感想を伝える形容詞を選んでいる。また、単語や文を付け足して相手の理解を深める発表ができた。	音のつながりやインとネーションを意識し、文の流れを保って話すことができた。話の区切れごとに相手の理解を確認するような表現が加えられていた。	伝える相手の人数や状況に応じて目線を振ったり話題に合わせた表情やジェスチャーを取り入れた発表ができた。
	2	伝えたいものを選んで調べ、日本文化についての説明や感想を伝える形容詞を選んで発表することができた。	使えることもあるが、最後まで話すことができた。叙述と自分の考えの違いがわかるように区切って発表できた。	相手に目線を振ったり、ジェスチャーを入れたりした発表ができた。
	1	お手本を使った発表しかできなかった。	途中で止まってしまい、続けることができなかった。話の区切れがわかる発表ではなかった。	資料や下ばかりを向いて相手に目線をあわせられなかった。

※1 泉ら（2018）では別の観点となっているが本稿では「英語らしさ」という大きな枠組みでまとめている。

泉恵美子・山川拓・黒川愛子・津田優子（思考力・表現力を育成するパフォーマンス課題と評価―小中の英語教育における取組―）『京都教育大学教育実践研究紀要』第18号、2018年、pp.213-222.

次、大阪成蹊大学では、このようなルーブリックを授業ごとにつくるのではなく、一般的な大きな「大学共通ルーブリック」というものをつくれないうことで設定されております。例えば、レポートとプレゼンテーションという二つについてこのような大学の共通ルーブリックをつくっています。レベルが0から5までの6段階です。レベル5が卒業レベルで卒業論文のレベルです。その中で上のところを見ていただくと、1回生はレベル1、2、3ぐらいで伸びていったらいいな、2回生、3回生はこの真ん中のレベル2、3、4で、4ぐらいまで行ったらいいな、4回生になれば、最低ラインが3をできるようになってほしい、いい卒業論文を書ける子は5だということで、長期的に4年間の姿として設定されています。このような形で、4回生の卒論研究においてはそこだけをくり抜いて卒業論文ルーブリックという形で、最後の発表会や卒論の評価で活用いただいています。

少しお話が長くなっていますが、結局、このようなルーブリックをつくるのは教員にとって、何のためにいいのかということをお話します。まず、レポートを見ているときに、例えばレポートを返さないといけなかったら、一人一人、「ここがいいよ」「ここがだめだよ」というコメントを返すのはとても大変なことだと思います。けれども、このルーブリックがあれば、「あなたのレポート、あるいはあなたの発表はこうだよ」とチェックリストのように「スピードが速過ぎるか、遅過ぎる」ところに、丸をつけて返すことができます。実際に一人一人コメントを書いて返すよりも、ここをこのように、ぱっと丸をつけて返すということができると、非常に評価時間の短縮になります。

また、「評価の一貫性と公平性の担保」とスライドに記載しているように、評価がどんどんずれることをある程

度防げるのではないかということです。レポートの採点の最初の方と最後の方も、途中で変わることなく、「こういうところを見たい」「こういうところができたらA」と先にわかっているならば、一貫的にできるということです。

次に、「コミュニケーションの促進」です。実際にレポートを出すときに、ループリックをつけて「こういうふうなところを評価するから、書いてきなさい」と見せることができます。そうすると、その説明のときに、その「A」の姿として一番上のところを読んでいくことで、「こういうところが今回レポートとして大事なポイントなんだよ」と学生に伝えることもできます。

そして、「授業改善への貢献」です。授業において育てたい学生の姿を明確にすると、それを認識しながら授業をしていくことにもなってきます。このあたりはまたループリックをつかった後で見たいなと思っています。

最後に、繰り返しになりますが、学生にとってもメリットがあるのです。学生にとっては、「あ、そういうところができたらA評価をもらえるんだな。じゃ、ここを頑張って書こう」ということがわかります。つまり、目標とされる姿を明確にして、学生にも共有することができるのが、この一つめのメリットです。二つめは、これが、むしろこれから大事かと思います。実際には、レポートを提出させるだけでなく、返却するところまで一連の取組があることが望ましいのですが、レポートの返却時に、実際に先生の評価としてどこに丸がつけられているか、自分はどこができて、どこができていないかということまで示されていたら、学生はそれをもとに、今後の学習の見通しや改善点が自分でわかるようになります。そのためには、繰り返しになりますが、できればレポートを課して終わりではなくて、レポートを出してもらって、評価のコメントをつけて返すというところまで最低限やらなければいけないということになります。ここが求められてきています。

少し時間がないので、飛ばしますが、今、小中高でも主体的な学びというところで特に強調されているのが、学習者自身が自分の学びを振り返ること、そして次につなげることです。「今できていないところがここだから、ここを次は頑張ります」というように、自分の学びを自分で捉えることが求められてきています。小中ではそれをかなり進めていこうという動きがあります。同じく大学でもそれが必要ですので、そのあたりがループリックの作成にとっても大事なポイントかと思っています。

少し長めにしゃべり過ぎました。すみません。ということで、また後ほどの議論でデメリットのところがたくさん出てくるかと思うので、1個飛ばしました。それでは、これからはループリックを実際につくってみるワークショップになります。

-----グループワーク-----

若本 ワークについては、30分間は取りたいと思いますので、ご協力をお願いいたします。皆様のお手元にハンドアウトが行っていると思うのですが、そちらの方をごらんになっていただいているのでしょうか。これは英語英文学科の授業の中で使わせていただいているもので、キャリアイントロダクションという授業で使っているものです。スクリーンを見ていただきますと、このような全員必修の科目でございまして、2010年から英語英文学科で取り組んでいるもので、特に早い段階から、キャリアを意識したキャリアモデル、学習モデルのようなものを考えさせようという半期科目の授業です。ちょうど、今日も私は1時間目に授業があったのですが、「人生の3大選択があるよ」と。「何なんだ」という。それから、大学の進学率や、みんなは幾らぐらい授業料を払っているのか、飯田学長がおっしゃっているようなソサエティ5.0やシンギュラリティがやって来ると言われる2045年は何をしているのかなど、このようなことを考えさせながら、3人の教員がレポートを書かせています。特に私のパートでは、「卒業するときはどうなっているのか」。お手元にあるものは、2016年、2017年に学生が書いたレポートで、私が実際にAプラス、A、Bプラス、B、Cと5段階で評価をつけたものです。これをもとにさせていただいて、簡単に言うと、皆さんにループリックを実際につくっていただきながら、どのような評価になるのかということをグループで最終的には決めていただいて、それをレスポンスの方で、グループの総意として「これはAプラスなんじゃないか」など、Aプラスが二つあることもあると思いますので、それを考えていただきたいというお話でございます。それでは、赤沢先生、どのように進めたらいいでしょうか。

赤沢 まず、個人でお手元の⑥まであるレポートを採点してください。とくに①から④を中心に、もし余力があれば⑤と⑥もという形で、それぞれで評価をしてみたいと思います。ある程度、時間がたったところで、グループの中でお任せしますが、「じゃ、ループリックをつくってみましょう」という時間です。ラフなループリックになると思いますが、「どんな項目が立ちそうですか」ということ、そして、「どういうところができたらA評価としてつけていいですか」という先ほどの具体的な特徴を話して、その模造紙に書いていただけたらと思います。

若本 書くときには、スクリーンに映っているような、このような形で作っていただくということですね。時間

が今から30分です。レスポンドで確認する時間は30分だと思いますので、まず10分ぐらいで読んでいただいて、10分ぐらいで協議していただいて、10分ぐらいでループリックをつくっていただきます。まずは、5、4、3、2、1と、これを評価したらいいですか。

赤沢 5、4、3、2、1だと、少し難しいので、5、3、1ですね。A、B、Cの3段階ぐらいで考えていただいて、少し迷ったら4と2のような形にさせていただくといいかなと思います。最後に、赤沢の案としてなおかつ若本先生にも少し見ていただいたループリック案を配りたいと思っています。それは3段階で書いていますので、つくっていただくものは3段階でいいのかもしれませんが。もし迷って、あるいは細かく設定できるという班は5段階でもいいですが、基本は3段階でつくっていただこうと思っています。

(グループワーク)

若本 幾つかご質問が出ましたので、回答いたします。スクリーンにこのコースの目的が映っておりますので、先ほど申し上げたように、短期としての学習モデルと、それからキャリアとしての長期目標と、このようなことを考えて、卒業時の自分の姿を描きなさいということが目的といえますか、レポートの趣旨です。

(グループワーク)

若本 それでは、時間が限られておりますので。全部、評価できていないという部分もあるかもしれませんが、できている部分で、グループの中でシェアをして議論していただきたいと思っています。真ん中に模造紙があると思いますので、模造紙に、役割分担をしていただいて、今日のリーダーの方が話をまず進めていただきます。今、お手元の資料の上に名前が書いてあると思いますので、名前を見ていただきまして、まずは評価を、「5」なのか、「3」なのか、「1」なのか、グループの中で話をしてみてください。その後、では、どのような基準でこのループリックをつくってみたいのかと考えて、話をしてみていただきたいと思います。時間は短いですが、よろしくお願いします。

(グループワーク)

若本 それでは、レスポンドの方を説明させていただきたいと思います。まず、1番のイマデガワイマコさんのものについては、お手元のiPadを開いていただいて、この番号、を入れていただいて、そこで点数を入れてください。

(レスポンドにて投票)

若本 誠に申し訳ないのですが、そろそろ時間がやってきたというところがございます。一旦、ここで切らせていただきたいと思います。やはりループリックをつくるのは本当に大変ですね。時間がかかりますね。では、学長グループがかなり進んでいるという感じですので、学長グループに、どのようにつくっていただいたのかを見せていただいて、締めといいますか、まとめにしたいと思っています。では、皆さん、前に来ていただいて、ループリックを見せていただいてもいいでしょうか。皆さん、大きな拍手でお迎えください。

松元 テーブル3で話し合ったループリック表になります。四つの観点を挙げまして、まず「目的」という観点を挙げて、真ん中の、評価で言いますと「3」の評価をまず考えて、目的に関しては「4年後のなりたい姿が書かれているか」、「5」の段階に相当するものが「明確に書かれている」、1であれば「十分に書かれていない」としました。二つめの観点は、「それを達成するための方法が書かれているのか」ということで、「5」の場合には「明確に書かれている」あるいは「十分に書かれている」として、「1」の場合には「十分には書かれていない」としました。三つめの観点は、「それに対する意欲」ということを観点に挙げまして、「なりたい姿に近づこうとする意欲がある」のが「3」の段階で、「5」の段階は「強い意欲がある」、「1」は「意欲が乏しい」としました。「文章の表現方法」を最後の四つめの観点としまして、観点1から3を表現できていれば「3」、明確に表現できていれば「5」、ややその表現が乏しければ「1」としました。以上です。

若本 どうもありがとうございます。特に達成方法、または意欲というような形で書いていただいています。素晴らしいと思います。ありがとうございました。

さて、レスポンスの方を皆さんで見たいと思うのですけれども、まず、順番にいきたいと思いますが、番号がずれていて申しわけなかったです。1番がイマデガワイマコさんです。イマデガワイマコさんを見てみたいと思います。これが皆さんの結果ですね。何と、大きく分かれているというところなのですけれども、「3」としていただいたものが多いですね。私が実際に評価したのは「4」でございました。かなり直感的というところでございます。次は2番ですけれども、デマチヤナギマチコさんです。これについては割と一貫した皆様の答えかもしれませんね。「3」としたグループが3.1%、1グループを除いてはほぼCです。私もこれはCをつけました。ありがとうございます。その次のドウジョウハナコさんです。ドウジョウハナコさんはどうだったのかというところなのですけれども、これはBプラスとなっております。これを見ると、私は反省するのですけれども、私は実際の評価は「5」をつけてまして、Aプラスをつけたところでございまして、三つのグループと同じということでございます。次、キョウタナベキョウコさんでございまして。キョウタナベキョウコさんは、これもBプラスが多いですね。私は、このキョウタナベキョウコさんは「2」をつけてまして、あまり合っていないかもしれませんね。ループリックをつくっていませんでしたということが落ち度でございます。次のナカギョウコバナさんですね。これは「3」という方が多いです。これについては、私はBをつけています。「4」というところでございます。皆さんとは合っていなかったというところでございます。最後のキョウノサクラコさんですけれども、皆さんのところについてはAプラスが多いですね。キョウノサクラコさんは、私は「3」をつけたというようなところで、大多数と合っていなかったというところでございます。大分合っていないのは、私のループリックがまずかった、直感ではいけないところが問題かもしれません。

このようにして、レスポンスを使って皆さんの反応も見ることができるということでございました。

赤沢 今、グループに赤沢がループリック案としてつくったものを回していただいておりますが、お手元に行っておりますか。「若本先生課題のループリック例 赤沢案」というものを出しています。

まず大きく、形式面と内容面に分けてみました。「形式」については、若本先生は全く指導されていないということではあったのですが、レポートとして最低限このぐらいいはできてほしいという一般的なものを書いてみています。「内容」ですが、今回、先生方にいろいろ議論していただいたことを私はこのような四つに分けました。今のご発表を聞いて、あまり遠くないのではないかなと思っています。

赤沢 まず、①は英語を学ぶ理由です。単に「頑張ります」「TOEFLの点数上げます」ではなく、それが自分の夢と結びついて、きちんと必然的に英語を学ぶというところを、しっかり書いていたら、A(5)にしました。②が自分の将来の具体的な夢や職業のイメージを書いているかどうかです。現時点では定かではなくても、幾つかの具体的な例を示しているということがAの姿です。③は、それに照らして、今の自分の成果と課題です。特に課題、すなわち、このようなところがまだ弱いので頑張りたいと思うところ、あるいは、長所が書いているかどうかです。④は、「だからこそ、今、足りていないから、こういうところを頑張りたいということが具体的に書かれているか」ということを見ました。先ほど「意欲」と書かれていたのですが、「強い意欲を持っているかどうか」は何をもって測るかが難しいので、具体的に何か例を挙げて、「今、頑張るのは、具体的にこの活動をやる」と書いていたらいいよ、というメッセージも込めて、学生に配るのであれば、このような形にしてみたらどうかという案です。

また、活用についてですが、本当にこれで評価するということになった場合には、「形式」のところは、今回教えていないので、「点数には入れません」という設定もあるかと思います。あるいは、「形式は20点分にします。内容の部分は40点分入れます」というように重みづけをし、それも学生に示せば、「今、何が大事なのか」ということも学生はわかりますし、このAの姿というものがチェックリストにもなっているので、「ちゃんと書けているか提出するときに、もう1回見なさい」と言いますと、書けていない部分をもう1回書き足すなど、学生自身が自分で学びを進めていけると思っています。

最後は、スライドに幾つか示した論点です。結局、今日は若本先生のレポートをつるし上げる形になってしまうかもしれないのですが、この課題でそもそもどのような力を評価したかったのか、何のためにこの課題を出したのかということが、結構、議論になったかと思います。まず、「何を目的でこれを出したんですか」というところを、先にご質問をしてくださった先生もいらっしゃいました。この問いは私自身にも突き付けられます。私もいろいろとミニレポートなどを学生に課しているけれども、本当にその課題でよかったのかということを、改めて考えます。本当につけたい力を見るような課題を出さないと、学生にとってもただの負担ですし、なおかつ、このようなところを書いてほしいということを見せれば書けたのに、それを見せなかったから書かなかっただけかもしれません。そのため、自分自身が課題を出すときには、その点をしっかり意識することが必要であり、そのためにも、このようなループリックを一旦つくってみることがとても大事ななことかと思っています。学生にとってのメリットは、先ほど言いました。「こういうところを評価されるんだな。ではそこを頑張ろう」というように、目標とされる姿が明確

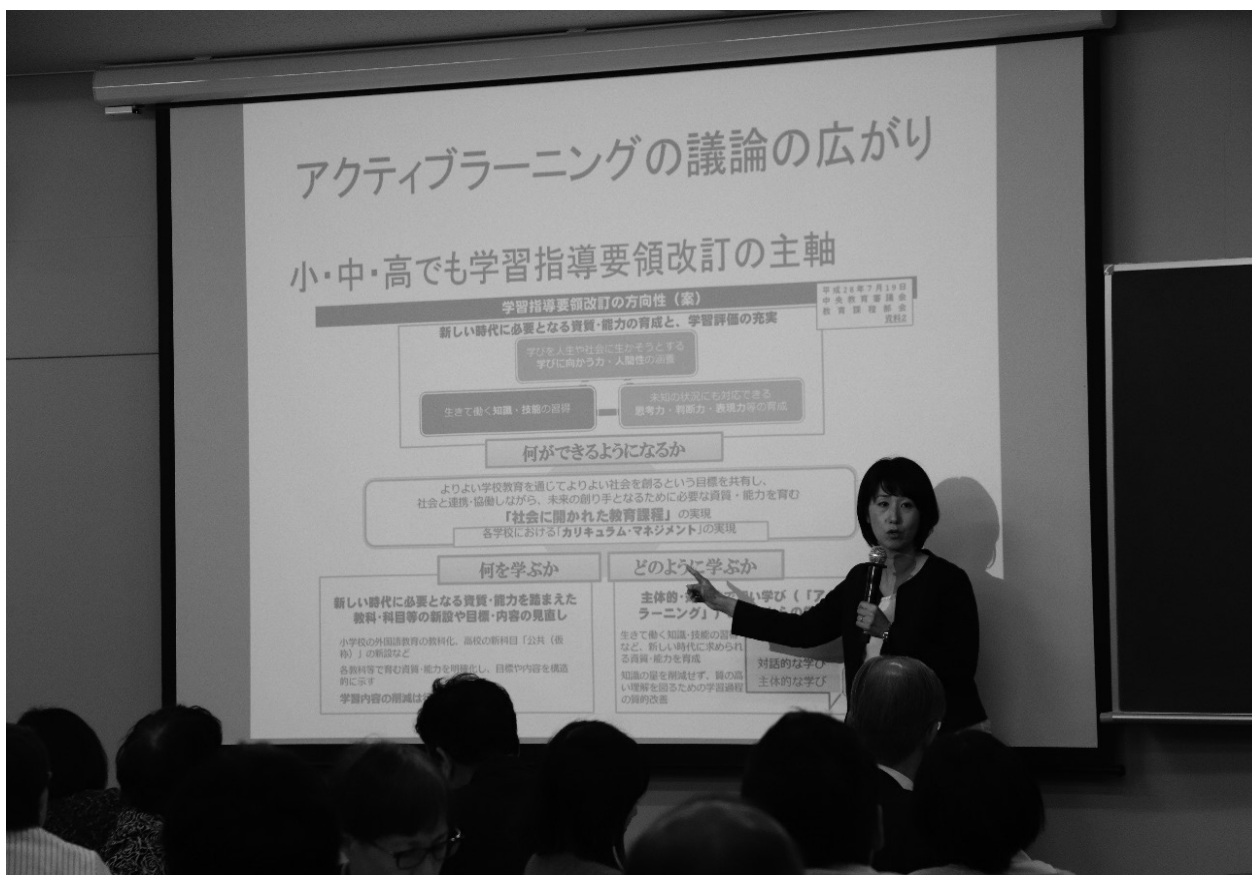
◆若本先生課題のルーブリック例(赤沢 案)

	A 十分満足できる	B 合格・到達している	C 努力が必要である
形式	①段落初めは1字下げるなど、<u>文章の基本的な書き方</u>ができており、優れた文章で書かれている。 ②<u>段落構成</u>が明確でわかりやすく、かつ、導入、展開、結論などに効果的な工夫が見られる。 ③<u>分量</u>について、内容を述べるために十分で適切な量で書かれている。	①段落初めは1字下げるなど、文章の基本的な書き方ができている。 ②段落構成が明確であり、わかりやすく書かれている。 ③分量について、内容を述べるための十分で適切な量で書かれている。	①段落がない、あるいは1字下げができていないなど、文章の基本的な書き方ができていない部分が見られる。 ②文章の構成が明確ではなく、読みづらい。 ③分量について、短すぎる、あるいは長すぎるなど、内容を述べるための適切な量ではない。
内容	①<u>英語を学ぶ理由</u>、英語の学習に対する自身の必然性が、将来の職業・夢との関連で見通しを持って明確に書かれている。 ②<u>2021年における自身の将来の職業・夢</u>について、具体的なイメージを持って描くことができている。あるいは、現時点ではさだかではなくとも、いくつかの具体的な例を挙げて述べている。 ③将来の職業・夢に照らして、<u>現状の自身の長所や課題</u>について客観的に見つめ、明確に書いている。 ④<u>現在、そしてこれからの学生生活において、取り組むべき学修や活動</u>を明確に考え、述べている。あるいは、これから必要な行動の在り方について述べている。	①英語を学ぶ理由、英語の学習がなぜ必要になるのかについて将来の職業・夢と結びつけて触れている。 ②2021年における自身の将来の職業・夢について、おおまかなイメージを持って描くことが出来ている。 ③将来の職業・夢に照らして、現状の自身の長所や課題について触れている。 ④現在、そしてこれからの学生生活において、取り組みたい学修や活動について例を挙げて述べている。	①英語を学ぶ理由、大学での学習がなぜ必要になるのかについて触れていない、あるいは将来の職業・夢と結びついていない。 ②2021年における自身の将来の職業・夢について、イメージを持てていない。あるいは、持とうとする姿勢が見られない。 ③将来の職業・夢に照らして、現状の自身の長所や課題について、触れていない。あるいはそれが①、②と結びついていない。 ④現在、そしてこれからの学生生活において、取り組みたい学修や活動について、述べられていない。

になります。そして、丸をつけて返してあげる余力があれば、それを受け取ったときに「ああ、だからBなんだ」「だからここはBプラスなのか」「もうちょっと頑張ればAになるんだな」ということがわかると、次の同じようなレポートが出されたときに「そこを頑張ればいいんだな」と次に頑張るべきところが具体的に見えるようになります。こうしたサイクルが少しずつできるとよいと考えます。

最後に、結局、シラバスを考えるとこうした議論を活かしていくことができるとさらに良いと思います。来年のシラバスをまた考える時期になってきました。このような大事なレポートを最後にやるだけではなくて、途中、

途中でミニレポートをやらせるときに、同じような課題としてミニ課題として一度やってみて、それを評価して、ループリックとともに返してあげることができると思います。そうすると、最終のレポートの成果がぐっと上がるのではないかと考えています。これは私のシラバスですが、指導法なので、講義タイプとはいろいろ違うかもしれないのですが、まず、自分自身が模範授業（外国語活動の模範授業）をするときに、ループリックを渡します。私もあまりうまく授業ができない部分もあるので、それも含めて、指導法として教師として求められるポイント、授業のポイントのようなものが書かれたループリックを渡して、学生に評価してもらいます。結構、私の授業を辛らつに評価してくれるのです。けれども、「今の評価は全部自分たちにも返りますよ」と言って、次のマイクロティーチング（学生による一部分の模擬授業）のときに、「ほら、これ、できてないやん」と言って、到達点や課題として私の方からループリックに丸をして返してあげます。最後に指導案のレポートとして出させるときにも、指導案の中にしっかりとループリックで示された指導のポイントが書けているかというところも同じような観点になります。したがって、同じループリックを3回ぐらい活用して最後の成果物をつくっていくことをしています。



まとめ

このように、ある程度長期的なスパンで学生を見ていくというように考えていくことも大事だと思います。まずはループリックを一度つくってみてください。そして、同じような課題をするときに、そのループリックがまた少しの改訂で使えます。「こうした力を育てたい」ということを学生と共有しつつ、できていないところを見つめさせて、少しずつできるようにさせていくことが、ループリックにはできるのではないかと考えています。つくるのがとても面倒だということはあると思うのですが、今日、考えてみられた感じで、「このような観点を立てるのだな、目指すべき姿がAなのだな」というところは全部一緒ですので、ぜひ一度つくっていただけたらと思っています。以上です。

◆アクティブ・ラーニング研究会◆

◇第12回アクティブ・ラーニング研究会

日 時：2020年1月22日（水） 16：15～17：15

場 所：京田辺キャンパス 知徳館 C283教室

報告者：若本夏美 教育開発支援センター長

コメンテーター：日本語日本文学科 大島中正、食物栄養科学科 神田知子

アクティブ・ラーニングの必要性・その種類・可能性

教育開発支援センター長 若本夏美
 日本語日本文学科 大島中正
 食物栄養科学科 神田知子

はじめに

2019年度は6年ぶりにアクティブ・ラーニング調査を実施した。同調査は、アクティブ・ラーニングの必要性が高まっている昨今、本学で実施されている授業において、アクティブ・ラーニングを用いることにより教育効果が高まった例や、社会連携、ICT活用、ラーニング・コモンズ等の学内施設活用を含めたアクティブ・ラーニングがどのように実施されているかを学内で共有することを目的として実施した。実施期間は2019年7月1日から10月31日までとし、本学で導入している授業支援システム「manaba（愛称：マナビー）」を用いて、専任教員を対象に調査した。各教員が担当している科目の内、任意の1科目以上（原則として実技・実験・実習科目以外）を選択し回答してもらうという形式である。

本研究会では、その結果を全専任教員で共有し、「これからどのようにアクティブ・ラーニングをすすめればよいか」を考え、さらなる相互発展に向けて活用するために、同調査の結果報告を行った（研究会の時間は60分）¹。

アクティブ・ラーニングに関する調査結果報告

まず、同調査の回答率について報告した。全教員としては、171名中、93名から、延べ件数として135件の回答があり（回答率54%、図1）、回答の高かった学科を紹介した（図2）。

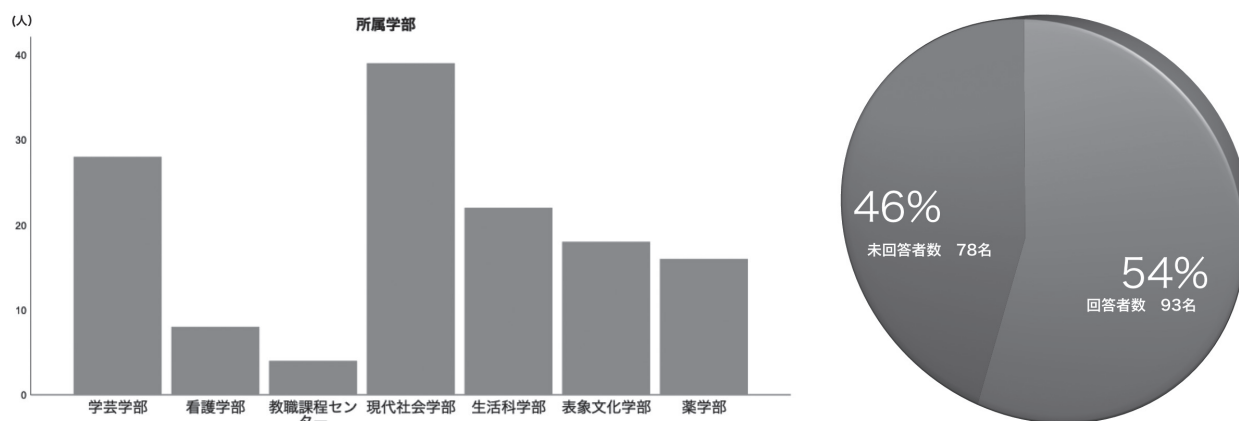


図1. 各学科の回答数（実人数）・回答率

1 今回、第12回を迎えたアクティブ・ラーニング研究会であるが、6年前の2014年11月19日（水）に講師として村瀬学先生（人間生活学科、演題「ひと工夫で授業に「相互性」を：基礎演習からゼミまでの「相互性」の模索」と塘利枝子先生（現代こども学科、演題「発達段階に添ったアクティブ・ラーニングの取り組み」）をお迎えして第1回アクティブ・ラーニング研究会がスタートしている（この前身は、2008年にスタートしたワイガヤ会、FD-YG会まで遡ることになる）。



表1 その他のキーワード



70 _____

キーワード	件数
グループ	6
マナビー利用	5
反転授業	4
フィールドワーク	3
協働(同)学習	3
ワークショップ	2



表2. 頻度の高いキーワード（3語以上）

Word	Count
1 グループ	206
2 レポート	92
3 マナビー	90
4 考える	69
5 テーマ	59
6 プレゼンテーション	50
7 クラス	42
8 コメント	34
9 深める	34
10 プレゼン	33
11 プロジェクト	32
12 取り組む	29
13 振り返る	29
14 フィードバック	28
15 高める	28



図6. Word Map：5語以上

1. 「社会連携」の事例紹介（社会システム学科）

城陽市（城陽市役所）から同志社女子大学の学生に考えて欲しい5つの課題を提示してもらった上で、その中から選んだ課題に関する解決策を発表する方法を採用している。この作業はグループワークの形式で進め、今年度については13名の履修者を3つのグループに分けて調査を行った。城陽市の協力は、先に述べた学生に考えてもらいたい課題の提示、城陽市についての説明プレゼンの実施、城陽市の各所を見学するためのバスツアーの開催、学生からの質問に対する対応、7月に実施される最終プレゼンへの参加など、多岐にわたっている。

城陽市との連携以外の授業時間については、班ごとの作業や最終プレゼンに向けた練習の時間としている。他に授業時間外に集まって作業を行うなど、履修者が自主的な学習を行っている様子を見ることができた。担当教員は、作業内容およびプレゼン内容に関する指導を行った。

コメント

市とウィンウィンの関係をどのようにして築くことができるのか、他の先生方とも共有したい有用かつ貴重な事例である。市と教員との間に信頼関係の構築が必須であり、教員一人だけでは難易度が高く、仕掛け人としての苦労が推察される。市と協同することは今後大学として重要であり、他の学科でも実践したい事例の一つである。

2. 「ICT 活用」の事例紹介：（食物栄養科学科）

「ガスバーナーのつけ方」、「無菌操作の基本」についての動画を撮影し、動画に合わせた手順書 pdf ファイルを作成した。今年度はスマートフォンでも見るできるよう、動画を YouTube にクローズ状態でアップロードし、その URL をマナビーのコンテンツに上げるとともに、コースニュースにて目的を説明した。また、実験実習内でも授業時間外に2年次の復習をするように説明した。その際、動画データを履修者以外の者に転送しない等、マナーを守って利用するように指導した。

コメント

マナビー上で動画を共有する場合は、アップロード可能なファイル容量に上限があるため、動画ファイルの大きさ次第によりアップロードできなくなるのが難点であった。YouTube を経由することにより、ファイルサイズに左右されることなく学生と容易に動画を共有できる方法は画期的である。また、学生にとっては、スマートフォンで閲覧できる方が利便性は高く、また学生がスマートフォンで見ながら同時にパソコンも使える点も有用である。

3. 「ラーニング・コモンズ活用」の事例（メディア創造学科）

アクティブ・ラーニングとしては、外部講師による講演会、担当教員によるトークセッションをラーニング・コモンズのイベントエリアで実施した。また、Pechakucha という新しい方法でグループごとにプレゼンを行った。マナビーの「グループワーク」でプレゼンデータや成果物の提出を行うとともに、その過程で作業やディスカッションのために掲示板を活用することができた。ほぼ毎回、マナビーの「スレッド」において、受講生全員に簡単な振り返りを求めてきた。他、小グループごとに「本」（紙媒体）を制作し、最終的には他クラスの作品とともにラーニング・コモンズの展示スペースで展示を行った。

コメント

教室ではなく、ラーニング・コモンズで実施することにより、得られる利点が多く考えられる。例えば、グルー

発表や学生の制作物の展示を行えば、履修者に限定されることなく、多くの学生が見に来ることができる。プレゼンテーション等の準備についても、ラーニング・コモンズ内で準備することにより、順番を変えたほうがいい等の工夫を学生同士が共有することもできる。そのような学生の姿が、ラーニング・コモンズ内にいる学生同士で刺激となり、共有することができる。ラーニング・コモンズの有効な使い方については、次回アクティブ・ラーニング研究会においてさらに詳細に学びたい。

4. 「その他」の事例（人間生活学科）

ラーニング・コモンズのワークショップルームで授業を行い、履修者数分のPCを借り、プロジェクターで画面を映しながら、Outlook、Word、PowerPointなどの操作方法やレポートやプレゼンテーションの作成方法について学んだ。その他、フィールドワークとグループワークを実施し、大学周辺にて写真を撮りながら散策し、特徴的なスポットの抽出してもらった。その後、グループにてお互いの情報を共有し、地図にわかりやすくまとめ、発表した。また、レポートの提出だけでなく、その内容をPowerPointで発表させた。その発表に対し、学生同士で質問やコメントするようにした。

コメント

自ら体験したことをグループで共有し、伝える。参加者が中心となって学習が深まるというのがアクティブ・ラーニングらしい事例である。フィールドワークはアクティブ・ラーニングを実践しやすく、今後も多くの授業で実践していきたい。

グループディスカッション（Kahoot!）

ーアクティブ・ラーニングの効果はどこにみられるのか：

これからどのようにアクティブ・ラーニングをすすめればよいかを考えるために

発表 グループ1

アクティブ・ラーニングとしては、前の週に課題を与えて翌週に4人1グループで発表させる方法を行った。その結果、学生に自律的な学習が見られるようになった、学生間でディベートをさせて学生みずからテーマを決めて議論をさせることにより、学生が自発的に勉強する意欲が見えるようになった。学生自身に問題発見させることの重要性が見られた。

発表 グループ2

専門的な知識を必要とする薬学部や看護学部では、学生に教えなければならない知識が多すぎるため、大学だけでは学びきれないのが現状である。そこをアクティブ・ラーニングでどのようにフォローするのかを模索している。有用だと感じられたのは、学生が実習の中で得られた経験に対して、知識を再構築させるため、考えたことや感じたことを発表させるという方法である。形式的なアクティブ・ラーニングではなく、実践的なアクティブ・ラーニングを実施していきたい。

おわりに

今回の研究会、特にグループワークを通して日頃、話す機会が少ない他学科の教員同士がアクティブ・ラーニングについて意見交流をすることができたことは意義深いことであると思う。報告したように、同志社女子大学のアクティブ・ラーニングは着実な歩みを進めてきている。キーワードで最も多く用いられた言葉が「学生」であるように、同志社女子大学では第一のパラダイムシフト（若本他、2017）、すなわち「教師中心から学生中心」の授業へは成功裏に移行しつつある。今後の課題は、第二のパラダイムシフトすなわち「何を教えたか、ではなく、学生が何を理解し（Understand）、何ができるように（Can Do）なったのか」へのシフトを強めることであろう。その意味では、今回のアクティブ・ラーニング調査では、上位に上がってこなかった「フィードバック、シェア、共有（特に教員間）」というキーワードが今後重要となる。学生にプレゼンテーションやプロジェクトに取り組ませながら、そのパフォーマンス評価をどう効果的にこなっていくか、この点については、赤沢真世氏のループリックの活用方法（本紙、pp. 2-14）や松下佳代氏のパフォーマンス評価のデザイン（FD report Vol. 12, pp. 2-14）が大いに参考になる。

理論に耳を傾け、学生の声も聴きながら、同僚とアイデアを共有しながら、今後もさらに有用なアクティブ・ラーニングを実践したい。

Keep calm and go on an adventure.

参考文献

赤沢真世 (2020). 「講演「授業改善につながるルーブリック評価の意義と実践」」 FD report vol.13, pp.2-15.

松下佳代 (2019). 「高次の能力を捉えるための評価：パフォーマンス評価のデザイン」 FD report vol. 12, pp. 2-14.

QSR International (2019) . *NVivo (Version 12)* : Author.

若本夏美、今井由美子、大塚朝美、杉森直樹 (2017) . 「国際語としての英語：進化する英語科教育法」東京：松柏社.

◆教育開発実践報告◆

◇学芸学部

「学芸学部 FD 活動報告」

学芸学部長 中村 信博

改めてFDの定義を述べることはしないが、FDをめぐる諸議論においてはその具体的事例の検証も含めて、じつに多角的な考察が必要だろう。学芸学部では、例年各年度末に学芸学部FD研究会を開催して、年に一度、音楽学科、メディア創造学科、国際教養学科の3学科から順番に特徴的な授業事例などを紹介し、実践知と結合した多様な学びの可能性について理解を深めてきた。

本来はここで2018年度学部FD研究会について報告しなければならない。ただ、担当順が音楽学科であったこと、そして第11回アクティブ・ラーニング研究会（全学・2019年2月19日開催）での報告が音楽学科の椎名亮輔教授による『「音楽によるアウトリーチ」初年度の試み』であったことから、恒例の学部FD研究会は全学の研究会に合流させていただいた。椎名先生による報告の詳細は『同志社女子大学FDレポート』第12号（2019年3月）を参照されたい。報告では、授業科目として「音楽によるアウトリーチAB」が計画されたこと、相手校が京田辺市立小学校であったことなどから、実施にあたっては本学総務部総務課社会連携係の支援、他大学の複数の専門家、研究者の協力が必要であったことが強調された。FDが授業担当者の能力や独創性の検証のみならず、授業支援体制や他大学とのネットワーク、さらにアウトリーチの場合には相手先との柔軟で強固な協力体制の構築、充実、改善などを条件として成立することが示唆された。

つぎに3学科のFD活動の現況について簡単に報告したい。まず、音楽学科では昨年度の本欄において触れたように、初回の学科FD研究会（2019年1月9日開催）を開催し、専任教員それぞれが授業における課題などを報告し、対処法、工夫などを共有することができた。その後一年間の授業は各教員にとって、その成果を反映するものであっただろう。とりわけ、より大きな効果があったとおもわれることは、互いの授業が多少なりとも「見える化」したことによって、目標を共有化した教員コミュニティ（教授団）としての意識を強化することができたことだ。ただ、2019年度においてはこのFD研究会を継続して開催することができなかったことは残念であった。2020年度に期待したい。

国際教養学科では、学科FD研究会（2019年12月3日開催）において、2019年度にクラス編成および内容を大幅に変更した「国際教養演習Ⅰ・Ⅱ」についての改善状況の確認と評価を行い、次年度以降の担当について検討した。その結果、変更の達成状況について高い評価を共有することができた。学科としては初めてのFD研究会ではあったが、これまでもスキル系（Speaking, Listening, Reading, Writing）クラス担当者において相互に連携しながら、受講者全員の履修状況（学習状況、評価など）共有の工夫が蓄積されている（この活動については一昨年の本欄を参照）。また、毎回の学科教員会議においても各授業において担当者と履修者が直面する課題、国際教養留学中の学生からの月次報告（Monthly Report）などが詳細に検討されてきた。FD活動は多様な形で実施されている。

メディア創造学科のFD研究会（2020年1月10日開催）においては、第12回アクティブ・ラーニング研究会（2020年1月22日開催）において、本学における特徴的なアクティブ・ラーニング4事例のひとつとして紹介された「メディア創造基礎演習B」について、担当者のひとりである村木美紀准教授からその詳細が報告された。その後、活発な質疑によって科目の目的、指導体制、工夫、履修者の達成度などについて共通の理解を深めることができた。同科目は、2018年度の学科名称変更とカリキュラム改正に伴って、導入期教育の重点科目のひとつとして新設されたものである。ちなみに「基礎演習A」（1年次春学期）は「ドキュメンタリー制作」、「基礎演習B」（1年次秋学期）は「紙媒体による情報伝達」、「基礎演習C」は「ロボットAIの社会利用」（2年次春学期）を主要テーマとして構成され、各科目ともそれぞれ3名の教員によって共同かつ組織的に運営されている。いずれもメディア創造分野において自覚的学修者となることを早い段階で意識化することを目的としたものである。「基礎演習B」は授業モデルを他に求めることなく、オリジナリティーあふれる授業を目指して、毎回、長時間をかけた相談と打ち合わせによってアクティブ・ラーニング型の授業が実現されている。各クラスとも10班前後の小グループによって課題解決型の学修をつづけるのだが、その成果はかならずPechakucha形式（本学でも一部に導入されている）のプレゼンによって報告されることになっている。また、外部講師による講演、担当教員3名によるトークイベントなどが実施されていることも報告された。ほぼ1/3の授業回数がラーニング・コモンズのイベントエリアなどを利用した合同授業でもあり、学年の一体感を醸成するのにも大きな貢献があるようにおもわれる。

最後に、厳密な意味でFD活動と言えるかどうか不明ではあるが、少なくとも関係しそうな小さな活動のひとつを紹介したい。最近、メディア創造学科では学科会議直後にごく短時間の懇談会の時間を設けるようになった。わずか10～15分程度のことであるが、その日の議題にとらわれずに授業や学科運営に関する「どんなことでも」自由で和やかな意見交換ができる場となっている。そこでは、最近のアプリの傾向や学生たちの使用状況が話題になり、マナーの意外な使い方が語られたりする。そこで魅力あふれる授業のアイデアを聞いていると、次回はアイデアを提供する側にならなければとの気持ちにもなるものだ。

学芸学部でのFD活動はまだまだ緒に就いたばかり。だが、多くの可能性を秘めている。

◇現代社会学部

「〈継続は力なり〉～現代社会学部のFD活動」

現代社会学部長 松崎 正治

現代社会学部では、「チョコっとFD」という名称で、学部教員会議の開始直前に10分間のFD研修を2017年度から始めて3年目になる。

2017年度と2018年度は、学部教員が毎回2名ずつ、自分の授業について、実践報告を行ってきた。聞き手の教員は、コメントカードに1分間で数行コメントを書く。聞き手のうち2名にはコメントカードの代わりに、包装紙に応援メッセージを書けるチョコに言葉を書いてもらう。会議前のチョコっと短い時間に行い、応援メッセージ付きのチョコを味わう「チョコっとFD」である。

2017年度から2018年度にかけては各年度9回18人、合計36名の教員が、それぞれの実践報告を行った。お互いの授業の様子を知り、自分の授業にも活かせるものは取り入れていこうというコンセプトであった。2018年度の学部FDアンケートによると、「同僚性を高めること」「学部のカリキュラムの具体像を知ること」に役立ったという評価が多かった（『FDレポート第12号』2018年参照）。

2019年度は、【初年次教育】をテーマに、毎回1人が10分報告をした。次の授業科目を報告いただいた。（開講学科名GSは社会システム学科、GKは現代こども学科）

GS・GK「基礎演習」、GS「現代社会入門」、GK「現代こども学概論」、GS「社会リサーチ入門」、GK「フィールドワーク入門」、GS「英語（CASE）」の7科目である。

これらの報告から、初年次教育では次のような指導が重要であることが認識できた。

- 〔1〕大学に慣れ、自分の居場所を見つけ、自分の未来を構想する態度を育てること。
- ①高大連携の視点での円滑な接続、②キャリア教育の入門、③エンパワーすることや大学での居場所作り（クラス）。
- 〔2〕大学の探究的な学び、発信する学びを身につけていくこと。
- ④学び観の転換（覚える勉強→主体的に学んでいく学習）、⑤大学での学び方を学ぶことの重要性、⑥読む書く聞く話すの基本技能の育成、⑦プレゼンテーションや発表など学習成果を積極的に発信していく体験、⑧問題意識をもって学びを深めていく方法を知る。

また、2019年度のもう一つのテーマは、【新しい課題】であり、その年度のトピックになることを3回にわたって取り上げた。

第一は、2019年3月3日～4日に開催されたFDフォーラムに参加した教員からの報告である。①「大学地域連携を通じての学生教育」における「〈専門外の教員〉が行う地域連携の事例紹介」の報告、②北海道富良野地域での地域連携型学習の成果に関して、学生を主体とした発表スタイルの特質とその教育効果についての報告を紹介した。

第二は、全学で取り組み始めた「ルーブリック評価を生かした授業」についてである。目標の設定と目標に到達すべき段階（到達度）の記述（可視化）がポイントであること、それが教員には評価の目安となり、学習者には学習の到達度の目安となることが示された。

第三は、2019年度春学期から全学的に取り組む「到達目標達成度の評価とエビデンス」についてである。授業の評価は、カリキュラムマップにおける各科目の位置づけや役割から行うように変更される。そのために、エビデンスとなるデータを集めておく工夫事例が紹介された。

それぞれ、すぐに取り組むべき内容であるために、時宜を得たFD研修となった。

以上のように、現代社会学部の「チョコっとFD」は、3年を経過して28回を数える。1回10分と短い時間であるが、〈継続は力なり〉の精神で、積み重ねている。

◇薬学部

「薬学部における問題解決能力醸成のためのルーブリック導入と運用」

薬学部長 芝田 信人

従来のテストを使った評価方法では学生の知識や理解を判定する事はできても、思考・判断、スキルなどのパフォーマンス系の評価は難しいと言われている。近年の薬学教育では、知識や理解力の上に偏重する評価を超え、卒業時には学生が得た知識を有機的に結びつける能力を身につけ、薬学を実学として医療の現場で応用できる素養もあわせて評価することが重要となっている。

薬学部では、このような大学教育の変遷を踏まえ、薬剤師として医療現場で自律して問題解決にあたることが出来る学生を育てるべく、2016年度から、薬学基礎研究（3年次）、薬学研究Ⅰ（4年次）、薬学研究Ⅱ（5年次）、薬学研究Ⅲ（6年次卒論）のそれぞれの科目にルーブリック評価を導入した。これらは講義科目ではなく、3年次秋学期からの研究室配属により各研究室で与えられた課題を研究し、卒業論文に結び付けるという科目となっている。

各研究室において、学生が研究テーマを実施するのに必要な要素（パフォーマンス課題）に対して、薬学的知識、様々なスキルや思考力等を総合して使いこなすことを求め、それらの到達目標に応じてスコア化できるよう、ルーブリックを作成した。次ページに掲載したルーブリックは、その一例（薬学研究Ⅲ評価用）を示す。パフォーマンス課題として「研究室活動」、「コミュニケーション」、「プレゼンテーション」の3つに区分し、それらに対するコンピテンシー（規準）を各5～7項目設定し、それぞれの到達目標を5段階のスコア（0～4）で割り当てた。また、右端には本学のコンピテンシーである「DWCLA10」を配置した。

このルーブリックの運用法であるが、3年次秋学期に研究室配属された学生に対し、その研究室の主宰教員がこのルーブリックを見せ、研究室活動を通じての薬学基礎研究、薬学研究Ⅰ、Ⅱ、Ⅲの思考・判断、スキルなどのパフォーマンス系の評価は、ルーブリックスコアに基づいて判定すると説明することから運用を開始する。学年の進行と共に、「薬学基礎研究」、「薬学研究Ⅰ」、「薬学研究Ⅱ」、「薬学研究Ⅲ」と科目名は変わっていくが、それぞれの科目で指定されるレポートや卒論等の提出物とルーブリックによるスコアとをあわせて単位認定のための点数をつける。なお、ルーブリックの運用では、学生のパフォーマンスレベルがどの程度に到達しているのかを把握すること、あるいは、学生自身が自分の現在の到達度を知るためのものであるべきという観点から、到達度2以上をパフォーマンスレベルの要望する基準に到達しているものと判断して運用している。

薬学部では、これらのルーブリックの作成に当たり、将来、薬剤師として臨床現場で問題解決能力を存分に発揮できるための素養を如何にして卒業するまでに涵養するかを念頭に、物事への取り組みに対する態度や姿勢というものを評価するために「研究室活動」、「コミュニケーション」および「プレゼンテーション」を区分項目として取り上げている。これらに散りばめられたコンピテンシーは、薬剤師として臨床現場で主体的に行動し、患者を中心としながら、患者や他の医療スタッフとのコミュニケーションを円滑に運び、薬学を医療現場で実践していくための素養につながると判断している。また、ルーブリック運用の利点として、①評価対象とフィードバック内容を結びつけやすいため学習効果が高くなる、②評価の公平性（評価の見える化）を担保できる、③過去のルーブリックを見直すことで成長を把握することができる、④教員と学生とのコミュニケーションツールとして運用できる、⑤批評的思考力のトレーニングが可能である、⑥学生の優れた個性を見出すことができる、⑦学生の意見を反映させることができる、と言われており、これらのメリットが十分に発揮されるようなルーブリック運用を今後展開していきたいと考えている。

薬学研究Ⅲ評価表(主査用)

※評価表は印刷し、個人ファイルに保管してください。

所属研究室:

学籍番号:

氏名:

タイトル:

区分	規準\基準	4 秀でている	3 基準に達している	2 基準に達している	1 基礎要素を獲得している	0 基礎要素を獲得していない	DWCLA10	評価
研究室活動	文献からの情報の読み取りと理解	研究に関連する論文を熟読し、専門用語を理解した上で、文献の内容を説明することができる。また、文献の問題点を指摘することができる。	研究に関連する論文を読み、専門用語をある程度理解した上で、文献の内容を説明できる。	研究に関連する論文を読み、専門用語の理解に不十分はあるが、文献の内容を一応説明できる。	研究に関連する論文を読むが、専門用語の理解に不十分が目立つ。文献の内容の説明にも不十分な点が目立つ。	関連する論文を読もうとする姿勢が認められない。	分析力 思考力	
	情報収集力	PCを用い、情報検索・文献検索やインターネットを介して適切かつ必要な情報を収集できる。	PCを用い、情報検索・文献検索やインターネットを介して適切かつ必要な情報をある程度収集できる。	PCを用い、情報検索・文献検索やインターネットを介して適切かつ必要な情報を最低限収集できる。	PCを用い、情報検索・文献検索やインターネットを介して情報を収集できるが、適切といえない情報もある。	PCを用い、情報検索・文献検索やインターネットを介して情報を収集できない。	分析力 思考力	
	情報処理力	得られた情報やデータを、PCを用いて適切に整理し分析することができる。	得られた情報やデータを、PCを用いてある程度整理して分析することができる。	得られた情報やデータを、PCを用いて最低限整理することができるが、分析には至らない。	得られた情報やデータを、PCを用いて整理することができない。	得られた情報やデータを、PCを用いて整理することができない。	分析力 思考力	
	創意工夫	研究を行うにあたり、自ら実験研究計画を立て、効率的・効果的に遂行する。	研究を行うにあたり、効率的・効果的な実施を目的とした具体的な提案をして遂行する。	研究を行うにあたり自分なりの工夫を行い、効率的・効果的に遂行する。	研究を行うにあたり、教員の指導を解釈して自分なりの工夫を交えて遂行する。	教員等の指示のみに基づいて研究を行い、自身の工夫が認められない。	創造力 変化対応力	
	研究(リサーチあるいは論文調査)に取り組む姿勢	自ら望んで研究時間を確保し、研究活動を優先する姿勢を示す。	概ね研究活動を積極的に進め、研究の方向性に関して具体的な提案をする。	積極的に研究活動を行い、研究上必要な指示を教員等に求める。	指示された研究活動を行っている。	必要最低限の研究活動を行っていない。	自己実現力 リーダーシップ 自己管理能力	
コミュニケーション	研究室の一員として	研究室にて研究活動にふさわしい学生間の雰囲気づくりに貢献する。	教員や他のメンバーと積極的な交流をし、研究室運営に貢献する。	研究室上あるいは研究室運営上必要な報告、連絡、相談を行う。	研究室運営上必要な報告、連絡、相談を行うが、研究上ではできていない。	研究室上あるいは研究室運営上必要な報告、連絡、相談ができていない。	コミュニケーション力	
	自身の専門的なテーマに関する討議	さまざまな角度から専門のテーマについて十分に学習を行い、他のメンバーと討議できる。	専門のテーマについて十分に学習を行い、他のメンバーと討議できる。	専門のテーマについて学習を行い、他のメンバーと適度に討議できる。	専門のテーマについて学習を行っているが、討議は不十分である。	専門のテーマについて学習を行っていないので、討議できない。	コミュニケーション力	
	他人の意見に対して	尊重して聞く態度を示し、十分に理解した上で、さまざまな視点から考えることができる。	尊重して聞き、相手の気持ちなど深いところまで理解して考えることができる。	尊重して聞き、言いたいことを正しく理解できる。	尊重して聞き、一過り理解できる。	尊重していないが、偏見にしており、理解できていない。相手に対する自己中心的な批判が目立つ。	コミュニケーション力 思いやる力	
	自分の意見について	さまざまな説明の方法や手段を駆使し、わかりやすく伝え、意見の異なる相手との相互理解を得ることができる。	わかりやすく伝え、意見の異なる相手との相互理解を得ることができる。	伝えることができるが、相互理解へは至っていない。	それなりに伝えることができる。	伝えていないが、伝わっていない。自己中心的な意見が目立つ。	コミュニケーション力	
	チームワーク	適切に他者と協調・協働して行動できる。	ある程度他者と協調・協働して行動できる。	最低限他者と協調・協働して行動できる。	他者と協調・協働して行動しようとするが、適切でない。	他者と協調・協働して行動することができない。	コミュニケーション力	
卒業論文・プレゼンテーション	倫理観	自己や良心と社会の規範やルールに従って適切に行動できる。	自己や良心と社会の規範やルールに従ってある程度行動できる。	自己や良心と社会の規範やルールに従って最低限行動できる。	自己や良心と社会の規範やルールに従って行動しようとするが、適切でない。	自己や良心と社会の規範やルールに従って行動することができない。	思いやる力 自己管理能力	
	論文のテーマに関して	研究の背景や状況が十分に把握できており、課題の目的を明確に説明できる。	研究の背景や状況が正確に把握できており、課題の目的を明確に説明できる。	研究の背景や状況が把握できており、課題の目的を説明できる。	研究の背景や状況を把握できていないが、課題の目的を明確にしている。	学習が足りていない。	プレゼンテーション力 分析力 思考力	
	調査・研究方法・結果に関して	その順序に沿って明確かつ効果的に説明できる。	その順序に沿って効果的に説明できる。	その順序に沿って説明できる。	説明しているが、不十分である。	説明できていない。	プレゼンテーション力 分析力 思考力	
	結果から得られる考察に関して	テーマと関連づけて説明し、結果の持つ意味を十分に検証したうえで考察できる。	テーマと関連づけて説明し、結果の持つ意味を検証したうえで考察できる。	テーマと関連づけて説明し、結果の持つ意味を考察しているが、やや不十分である。	ある程度テーマと関連づけて考察することができるが、不十分である。	テーマと関連づけた考察をしていない。	プレゼンテーション力 分析力 思考力	
	結果を踏まえての課題提起と今後の展望について	発表で明らかにした点および問題点などを明確に示し、今後の展望について説得力を持って述べるることができる。	発表で明らかにした点および問題点などを明確に示し、今後の展望について述べるることができる。	発表で明らかにした点を示し、今後の展望について述べることができる。	発表で明らかにした点を示し、今後の展望について述べているが、適切ではない。	発表で明らかにした点を示すのみで、今後の展望について述べていない。	プレゼンテーション力 分析力 思考力	
総合評価	ポスターの図表について	相手に理解させようとする姿勢が適切に用いている。	相手に理解させようとする姿勢が適切に用いている。	相手に理解させようとする姿勢が適切に用いている。	相手に理解させようとする姿勢が適切に用いているが、不十分である。	相手に理解させようとする姿勢が認められない。	プレゼンテーション力	
	発表の態度について	発表の道筋を良く理解しており、堂々と発表(声、表情を含む)、相手から理解を得ることができる。	発表の道筋を良く理解しており、堂々と発表できる。	発表の道筋を良く理解しており、堂々と発表できる。	発表の道筋を理解しており、発表できるが、不十分である。	発表の道筋がたっており、発表の態度に問題がある。	プレゼンテーション力	
	質疑・応答について	質問の意味を正確に把握して的確な答えをスムーズに返すことができる。	質問の意味を正確に把握して適切な答えを返すことができる。	質問の意味を正確に把握して適切な答えを返すことができる。	質問の意味を把握して返答しているが、不十分である。	質問の意味を把握しておらず、的確な返答をしていない。	プレゼンテーション力	
総合評価								0
概評								

主査氏名:

印

◇看護学部

「看護基礎教育のこれからを考える」

看護学部長 岡山 寧子

看護学部は開設して5年目が過ぎた。昨春初めて送り出した卒業生たちが、看護現場でそれぞれ頑張っていることを耳にするたびに、安堵したり、心配したりの日々である。経験的に、学部教育の成果というものは、学生たちが社会人となり、その歩みゆく姿に、ふっと実感することがあるように思う。

2019年度のFD研修会は、厚生労働省看護基礎教育検討委員会委員、日本看護学校協議会会長の池西静江先生をお招きして、「看護基礎教育のこれから－カリキュラムの改正を見据えて」というテーマでお話いただいた（3月19日）。このテーマにしたのは、現在の看護界において、看護基礎教育の一つの転換期を迎えようとしていること、そして看護学部は完成年度を経過し、今までの教育カリキュラムの振り返りが必要な時期を迎えているためでもある。

少子超高齢化が一層進展している中で、地域医療構想の実現や地域包括ケアシステム構築の推進に向けた適切な医療提供体制の整備が緊急に必要であること。また、AIやIoTなどの情報通信技術（ICT）の医療・介護分野への導入が急速に進み、看護職は適宜対応していかなければならないこと。さらに、看護職員の働く場が、医療機関ばかりでなく在宅や施設などに広がり、求められる力が多様化していることなど、看護を取り巻く状況には多くの課題がある。このような背景の中で、看護基礎教育をどのように行っていくべきか。これに応えるために厚生労働省では、看護基礎教育検討会を立ち上げ、保健師助産師看護師学校養成所指定規則の5回目の改正に向けての提言を発信するために進め、2019（令和元）年10月にそのまとめが報告された。この改正は、2022年入学生から適用される予定である。本学部でも、改正に向けての準備を進めるにあたり、どのような改正なのか、そのポイントをご教示いただきたいとの声があり、看護基礎教育検討会の委員の一人である池西先生にお話し頂いた。池西先生は、長年培ってこられた看護基礎教育活動での実践知を広く伝えたいとOffice Kyo-Shienを立ち上げ、全国的に活躍されている。

池西先生は、少子高齢化、在宅療養への移行、地域包括ケアの充実、看護職者の増加等の社会情勢をふまえて、看護師の量の拡大から質の確保の時代になってきたこと、それに伴い、今後看護師養成機関では、いかに質の高い看護師を育てるかが問われるということをお話しされ、そのうえで、今後強化すべき看護師の力として、保健指導力、臨床判断力、多職種と共同する力、地域・家族をみる力、ICT活用力を挙げ、そのためにはどのような看護教育が必要かの実践例を交えながら、熱く語っていただいた。教員たちは熱心に耳を傾け、講演後に活発なディスカッションがなされた。教員から寄せられた感想としては、大学卒になる看護師に何を求めるのか、改めて考えさせられた。他、臨地実習では他領域の教員との共通認識を持つことの必要性を大いに感じた。また、どういう学生を育てたいのかを考えていきたい。看護教育の変革に伴い、私たちも成長していかなければならない、などがあった。

今後、看護教育カリキュラム改正に向けての準備を進めていく中で、今回の研修は看護基礎教育を考える貴重な機会となった。

◇表象文化学部

「短いとうれしい（？）－30分レクチャー・シリーズ－」

表象文化学部英語英文学科主任 風間 末起子

この試みは2018年2月から始まって、2019年度の現在も続いている。

そもそものシリーズが始まったのは、英語英文学会の設立50周年記念（2017年）に寄せられた寄付金をもとに企画した教員冊子の作成からである。冊子は100ページほどのもので、英語英文学科の専任教員（当時14名）が、各自の研究や関心をエッセイ風に書いている。冊子のタイトルは、*Wondering Aloud: Reflections on Language, Literature and Culture*（英語英文学科編、2017年12月）である。

Wondering Aloud（＝thinking about in spoken voice, ボソボソ言いながら考え事をする）という表現はおもしろい。そこで、これを実際に見てもらおうと、毎月2名の教員が、30分レクチャーを、スペシャル・レクチャーと

いう呼称で続けている。

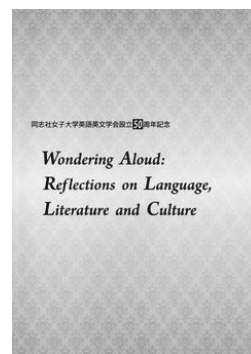
聴衆は学部生、院生、教職員で、教室は楽真館2階のワークショップ・ルーム、ガラス張りの30名収容の正方形の部屋で、開放的な空間である。

すべてのレクチャーに毎回出席したが、このレクチャーは少しも退屈しなかった。なぜだろう？

教員の30分レクチャーには、長年の研究の蓄積の上に、授業で培った話術の巧みさ（短いと個性が出やすい）が加味されて、しかも出入り自由な空間的な解放感のせい、緊張感もほどよく、質疑も活発で、いい感じであった。言っておくが、聴衆は少なかった。動員していない場合、そういうものだ。

授業の場ではなく、教員が、自分の研究領域を、短く、歯切れ良く話す。これは、学生に、勉学の楽しさを感じとってもらう有効な手段になった。時間が短い、内容が充実、テンポがよい、教員と学生の顔が見える、この4点すべてがそろった30分レクチャーには、いつもの90分講義とは違った魅力があった。

教員は、勉強の楽しさを誰よりも知っている者として、学生たちに、それを伝えたくてたまらない。日々格闘している。30分レクチャー・シリーズは、いとも簡単にその高いハードルを越えた。教員自身が楽しんでいたので、それが理由かもしれない。



「縦のつながりを育て、学びの見通しをつける」

表象文化学部日本語日本文学科主任 森山 由紀子

2019年度、日本語日本文学科では、毎年2月初めに行われる卒業論文発表会（4年次）および、演習成果発表会（3年次）、およびキャリア関連のいくつかの行事を、「日学のつどい」として連動させるいくつかの改革を行った。これは、授業ではなかなか保障できない学年を超えた縦のつながりを促進し、そのことによって、学生自身が4年間の学びにおけるそれぞれの現段階の位置を見定め、下級生のうちから将来を見据えた学びのデザインをそれぞれに意識していくことを目指すものである。

改革の一つとして、3年次生は当然のこととして、2年次生のポスターセッションへの参加を明確に義務付けたという点がある。さらに、そのことが学生にとっても意味を持つように、3年次演習の予備登録の締め切りを従来よりも1か月以上繰り下げ、3年次生の発表を聞いてからゼミ選択の最終決断を行うシステムを導入した。この改革によって、2年次生は、ゼミというものを具体的にイメージすることができ、ゼミ選択上のミスマッチが少なくなるというメリットが期待できる。また、評価シートを持った2年次生が多数参加することによって、3年次生は発表のモチベーションが高まり、他者にわかりやすく説明することを通して、4年次に取り組む卒業論文に向けた各自の課題がより明確になることが期待される。

もう一つは、昨年度から始めた午後の時間を利用した「日学生のための就活セミナー」の時間の半分を利用して、就活を終え卒論を提出した4年次生と、下級生とがフランクに話し合い連絡先を交換することのできる懇談会、「センパイに聞いてみよう」を新たに導入したことである。決して特別ではない等身大の4年次生との交流は、下級生が将来を見据えた学びの在り方を考える上で、極めて有意義であると考えられる。初年度は30人を超える4年次生の参加が予定されており、下級生が沢山参加することによって学びとキャリアを考える「日学のつどい」が定着してくることを願っている。

◇生活科学部

「食品加工・物性学実験」におけるアクティブ・ラーニング」

生活科学部食物栄養科学科教授 山本 寿

「食品加工・物性学実験」は食物栄養科学科食物科学専攻3年次生対象の必修実験科目の一つで、内容は「食品物性実験」と「加工食品の製造実習」に分かれる。1クラス約20人が5グループに分かれ、各グループ（2人ずつのユニット×2）が6セットの実験・実習項目を毎週ローテーションで移動する。

前者では、異なる配合で澱粉加工食品（外郎）や海藻多糖類（寒天）ゲルを調製して物性を測定したり、任意の

食品を熱分析する。ユニットごとに試（材）料を選ぶ自由があり、結果はその選択に依存するので、学生は独自に原因を考察して、レポートと発表で提示する。レポートは2本のみで、表現・論理・内容から厳しく評価される。発表は事前に指導される。これら研究型学習は学生にとって知的にハードで、アクティブ・ラーニングを伴う。

一方、後者では当初、標準的な加工食品を製造させていたが、学生が食品開発を志向することを踏まえ、「課題に沿った創作」という、自由度の高さを取り入れることにした。アレンジしやすいパンとアイスクリームについて、「出身県の特産物を使う」とか「幼児対象」とか、クラスごとに異なる課題を与え、学生の自由な発想で製造させた。



教科書に標準製造法が記載され、自分達の商品コンセプトに沿って改変する。標準以外の材料費は一定の上限で補助される。外観と試食による評価基準は「課題に沿っているか」と「美味しく、売れそうか」。実習の翌週、全体をスライドにまとめ、3分でプレゼンする。

この導入で、学生の取り組み姿勢が一段上がった。授業評価は全項目で高く、構想と試作という「実践的な予習」が加わって授業外学習時間は長い。火曜の授業終盤、他の学生も注目する中で完成品を披露し、試食評価されることに對して彼女らは圧を感じると同時に、意地のようなものが「予習」に駆り立てる。しんどいがやりがいはあるらしい。たまに傑作も生まれ、発想力と実現力は想像以上で、しばしば、普段、目立たない学生が力を発揮する。

今年度の課題は、春学期前半クラス「時代をイメージしたパン」と「3色アイス」、後半「ラグビー W 杯出場国にちなんだパン」と「野菜と果物を使用したアイス」、秋学期前半「切ったときに驚きのあるパン」と「ビタミン・ミネラル類がとれるアイス」。3色アイスの一つを紹介する。商品名は「豆に生きる日本人への癒し」で、プレゼンされた商品コンセプトは

- コンビニやスーパーで出会えない味のアイス → 豆で統一（きなこ、枝豆、小豆）
- 元号が変わり、日本を見直す → 日本の伝統的な豆と和菓子（最中）の融合
- SNS の普及を意識 → カラフルで写真映えするビジュアル

作者達の自己評価は、「素朴かつポップに可愛くできた。3色きれいに出た。最中により食感が変化した。豆臭さが出なかった」。過去に枝豆を使った例では豆臭くなったが、この作品の配合バランスは絶妙で、実際、豆臭さが鼻につかず、全体に淡い3色の一つ（緑）を構成し、日本らしい可愛さが醸し出されている。完成には、多くの思考と試行が費やされたと想像される。

この試みは、評価の公正性や費用補助の多寡など、アクティブ・ラーニング特有の問題を内包するが、明らかにメリットがデメリットを上回っている。普段とは異なる側面から学生を評価する機会が生まれたことも新鮮であった。

以上、この授業は2種類のアクティブ・ラーニングを含む。一つは専門教育という伝統的教授パラダイム下で潜在した「物性実験における試料選択 → 研究型教育」で、もう一つは新しい学習パラダイムに属する「課題に沿った食品開発＝高い自由度での創造」である。後者にはフィクションの力があり、創造体験が仕事／社会へのトランジションを促す。

◆授業に関するアンケート◆

「2019年度春学期 授業に関するアンケート総評」

教育開発支援センター長 若本夏美

はじめに

こんにちは。教育開発支援センター長の若本夏美です。

なかなか後半のページまで開いていただくことが希少な中、このページを開いていただき、ありがとうございます。はじめにのページでは大抵、形式的な挨拶を書くことが多いのですが、どこまで読んで頂けるか自信がありませんので、最初に一番重要なことを書いておきます。

授業に関するアンケートは2019年度、大きな変革の時を迎えました。ICT (Information and Communication Technology) の進歩と普及は留まる所を知らず、大学もまた例外ではありません。教育開発支援センターでは、これまで長年続けてきた紙ベースのアンケートから本学で導入している LMS (Learning Management System) である manaba (通称、マナビー) による授業アンケートに切り替えしました。併せて、「授業振り返りシート」を導入し (こちらは未だ紙ベース)、両者を一体化させながら授業の改善、特にアクティブ・ラーニングを推進する方針を立てました (図1)。

この変革の目的は以下、5点にありました。

- 1) アンケート実施の簡便化 (教員)：印刷された重たい授業アンケート用紙を教室に持参する必要が無くなった。
- 2) アンケート実施の簡便化 (学生)：ほぼ全員所持していると考えられるスマートフォンで実施することができる。デジタル・ネイティブ (Digital Native) と言われる現代の若者にとっては紙に書き込むよりも、スマートフォンの画面に打ち込む事の方が遙に快適であると考えられる (但し、この点については検証が必要である)。
- 3) アンケート実施の柔軟性 (学生)：アンケートは教室内だけで実施する必要はなく、欠席した学生もまた実施期間であればアンケートに参加することができる。
- 4) フィードバックの迅速化 (教員)：教員はセンターからの集計報告を待つことなく、manaba 上でグラフ表示によって、受講生の傾向を知ることが出来る。
- 5) 自由記述の復活：とすると紙ベースでの授業アンケートの自由記述欄は工夫はされていたものの (電子読み取り)、学生の声をじっくりと聞くことにおいては制限があった。今回、自由記述欄が以前の紙ベースの授業アンケートのように設定されているため、学生が授業に関する考え (感想、改善点などの教員へのアドバイス) を自由に書き込む事が可能となった。

一方で、何事にも「諸刃の剣」現象はあるもので、良いことばかりではありませんでした。便利になったからといって世の中が良くなるとは限らないことと似ています。学生のスマートフォンはギリギリまでギガ数を節約しているものが多く、全教室に Wi-fi が整備されていない状況下では、どの授業でもスムーズに授業アンケートを実施することは出来ていないようです。また、図2をご覧ください。

利便性を図った結果、肝心の授業アンケート実施率が平均で「約20%近く」下がってしまっています (2018年度秋学期の実施率は96%)。学科による多少の相違はありますが、90%を超えた学科・科目区分は存在しません。これは今回の「2019年度春学期 授業に関するアンケート」の最も重要な部分だと思います。理由は割と簡単です。便利になったことによって、単に教員が授業アンケート実施を失念してしまったことがその最大の原因と考えられます。各学科の教務主任や教育開発支援センター運営委員の先生方の声かけがなければこの実施率は更に下がってしまっていた可能性すらあります。紙ベースの授業アンケートであれば、実施していなければ現物が目の前に残ってしまうので、アンケート自体が自然なりマインダーになります。ところが、デジタルの場合には目に見えるものは何もありませんので、極端な事を言うならアンケートを実施していても、実施したことを忘れて (私自身です) 再度実施しようとして学生から止められるという現象すら発生します。これは初年度であることももちろんありますが、私達教員のコンピューター・リテラシー (Computer Literacy) がそれほど高くないことが影響しているのかもしれない。ただ、教員のそのような能力を今後高めてゆくだけでなく、アナログ的な対策 (backstop) を考え

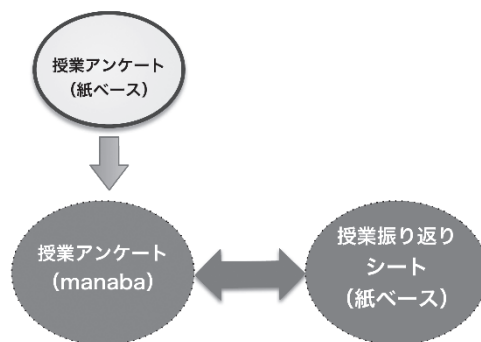


図1. LMS による授業アンケート

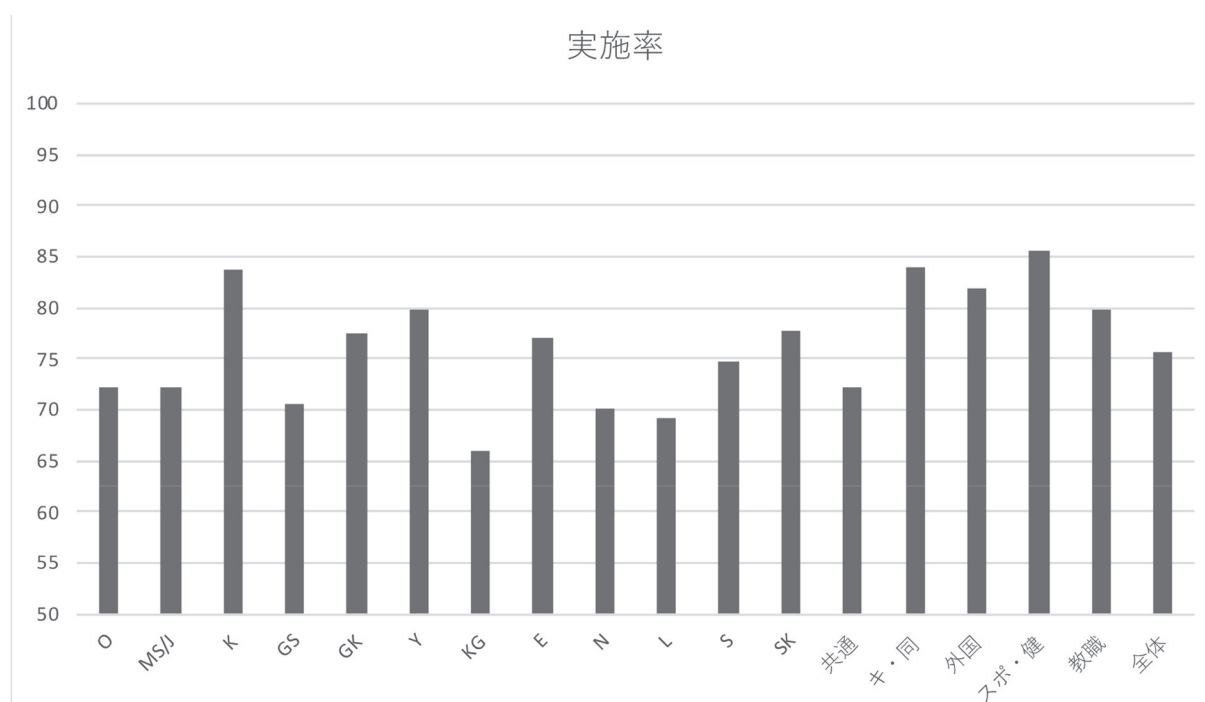


図2. 2019年度春学期授業アンケート結果（グラフ中の各学科・科目区分はp.42に表示）

る必要があると思います。先にあげた、その他の利点（2 - 5）については今後の検証を待ちたいと思います。

さて、本年度の結果について、これまで蓄積してきた授業アンケートとも比較しながら、以下、概観してみたいと思います。

（1）「授業実施に関する質問」の結果について

今回の授業に関するアンケート総評は、次の i から iv の 4 点を念頭に作成しています。

- 同志社女子大学ホームページにも掲載されている「2019年度 春学期授業に関するアンケート実施結果報告書（授業期間内実施科目）：全学および各学科等別集計結果、学科等間比較資料」（https://www.dwc.doshisha.ac.jp/faculty_and_staff/support_center/quest/questionnaire_report）を参照（元データ）。
- 各学科科目、共通学芸科目、キリスト教・同志社関係科目、外国語科目、スポーツ・健康科目、教職に関する科目について、A) 全体の傾向、及び B) 前年度からの変化動向を検討。
- 質問項目ごとの分析評価について：アンケートの質問は従来の 4 件法から 5 件法へ（1. そう思う [Agree]；2. ややそう思う [Somewhat Agree]；3. あまりそう思わない [Somewhat Disagree]；4. そう思わない [Disagree]；5. わからない [Don't Know]）。グラフ化するに当たっては、1 - 5 を逆転して点数化している。本来は、5 は「分からない」という回答であるので別基準とすべきであるが、今回の分析では単純に 1 - 5 を含め平均値を求めている。グラフ化にあたっては過去との比較を分かりやすくするために、1 - 5 を逆転している。

そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	わからない
5	4	3	2	1

4 以上は強い肯定、4 ～ 3 は弱い肯定、3 ～ 2 は弱い否定、2 以下は強い否定を示す。

- manaba による授業アンケートへの移行に伴い、従来、各学科主任、教務部長によって作成された報告書が本年度より廃止された。従来のような、各学科主任・教務部長による報告書には基づいていない。

この総評は、manaba で分析された「授業アンケート実施結果報告書」をもとに総括することを意図しています。本格的な「分析」は今後、一次データに基づき統計的手法によって行うべきであることは言うまでもありません。ビッグ・データが形成されてきています（授業アンケートデータだけでなく少なくとも10年以上の蓄積があります）。このような大学における IR（Institutional Research）に本学もそろそろ足を踏み入れる時期にあると思われます。

Q 1. シラバスとの合致

全体結果：

「Q 1：授業内容はシラバスに合っていましたか」

図3の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.3を上回っていました。

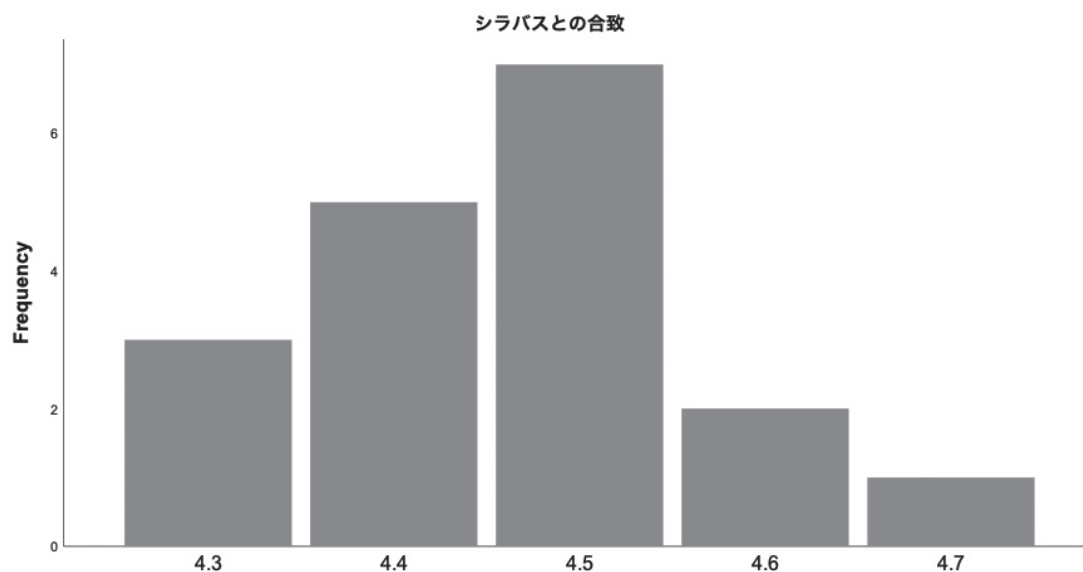
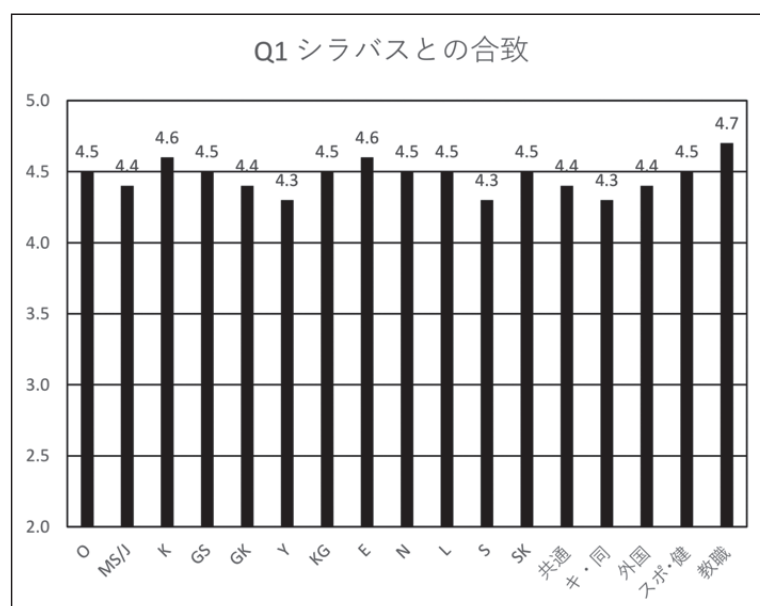


図3. 学科・科目区分の分布（Q 1）

質問紙の尺度の違いはありますが、同じ区分の平均値が3.60（2017年度春学期）→ 3.63（2018年度春学期）→ 3.64（2018年度秋学期）と全体として上昇傾向にあります。この結果から、全体的な傾向としてはほとんどの授業でシラバスに沿った授業が展開されていたと評価できます。シラバスには特に評価方法についての記述もあります。シラバス通りに授業が行われることは学生にとっても教員にとっても「当然」と受け止められている傾向が進んでいると思われます。この点は同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後はより一層わかりやすく実現可能なシラバスの構成方法を議論する時期に達していると考えていいのではないかと思います。

学科・科目別：

どの学科も良好な状況ですが、特に、回答者数が「5,735名」と最多の学生を抱える社会システム学科において「4.5」という中央値以上の評点である点は注目されます。多くの学生が受講する学科でのシラバスと授業の合致は学科運営上重要であり、授業を円滑に進める基盤となると思います。



Q 2. 受講生の理解度

全体結果

「Q 2：受講生の理解度を確かめながら授業が進められていましたか」

図4の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

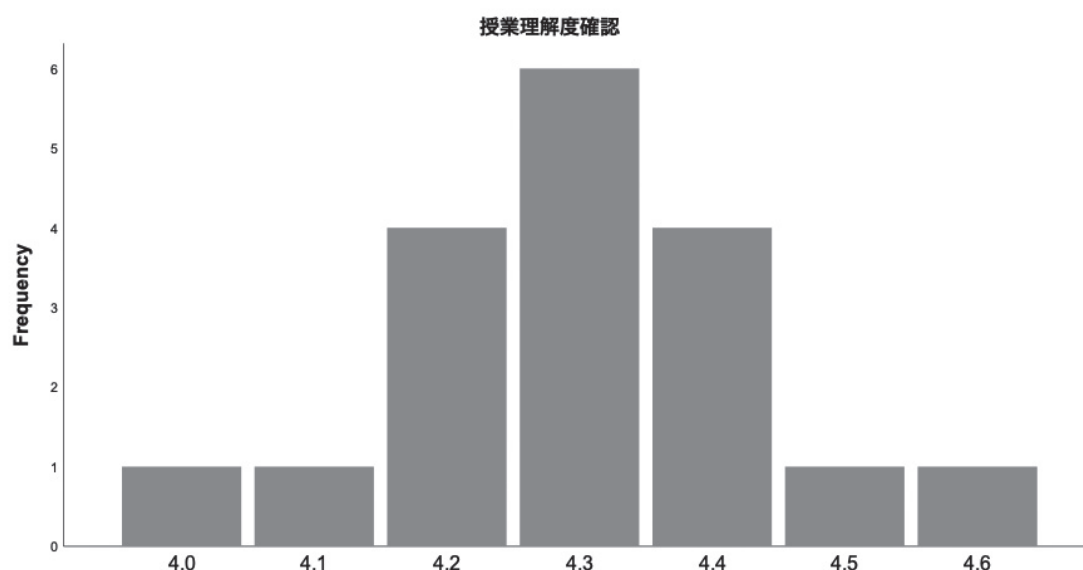
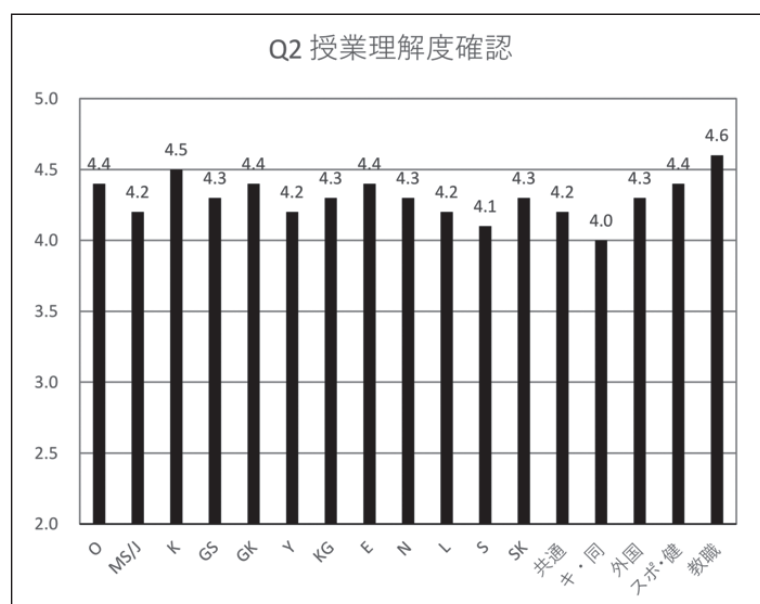


図4. 学科・科目区分の分布（Q 2）

同じく質問紙の尺度の違いはありますが、同区分の平均値が3.31（2017年度春学期）→ 3.38（2018年度春学期）→ 3.42（2018年度秋学期）と全体として上昇傾向にあります。ただし、Q 1と比較すると学科間によるばらつきは多少あるようです。「受講生の理解度を確かめながら授業が進める」ことはアクティブ・ラーニングの中核をなす部分であり、「学生に寄り添いながらきめ細やかな指導をする」ことは女子大学のリゾンドートルのひとつでもあります。今後はより一層理解度が確認できるような授業の在り方を、交流・共有しながら更に学生の理解度を確かめながら授業を進める工夫をする時期に差し掛かっていると考えられます。

学科・科目区分コメント

この項目、学科の定員やクラスサイズの大小によって影響されているようです。この点についてはSA（Student Assistant）やTA（Teaching Assistant）の活用など教員や学科での一層の取り組みが必要であることは言うまでもないところですが、学生／教員比率を下げるなど大学としての教育環境の一層の充実が求められるところです。日本語日本文学科（4.3）は学科の規模との対比においては高水準にあると考えられます。



Q 3. 授業レベル

全体結果

「Q 3：授業レベルは自分に合っていましたか」

図5の度数分布分析が示す通り、他の項目と比較してこの項目がチャレンジングであることは明白です。

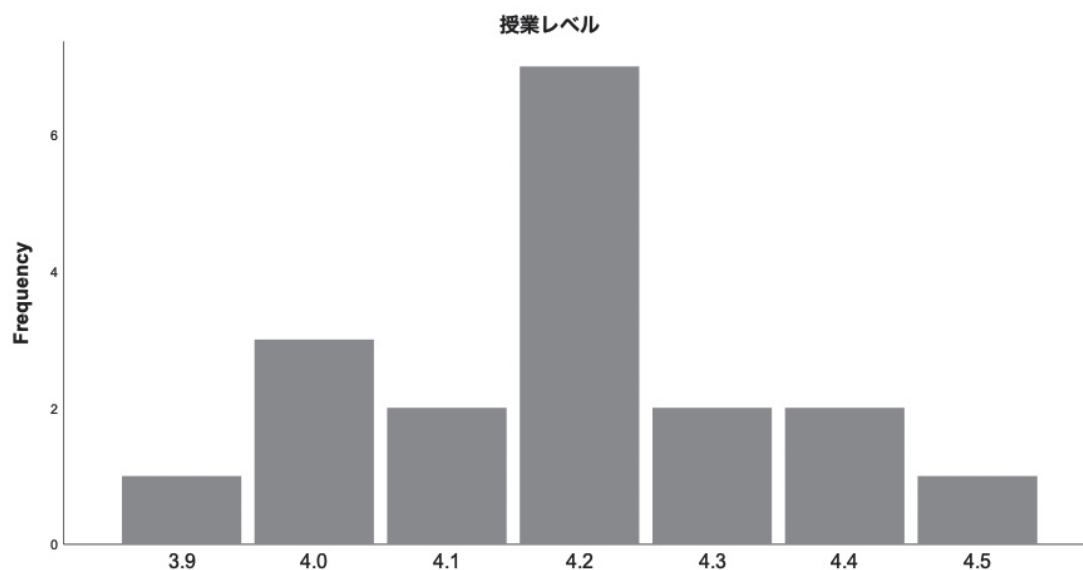
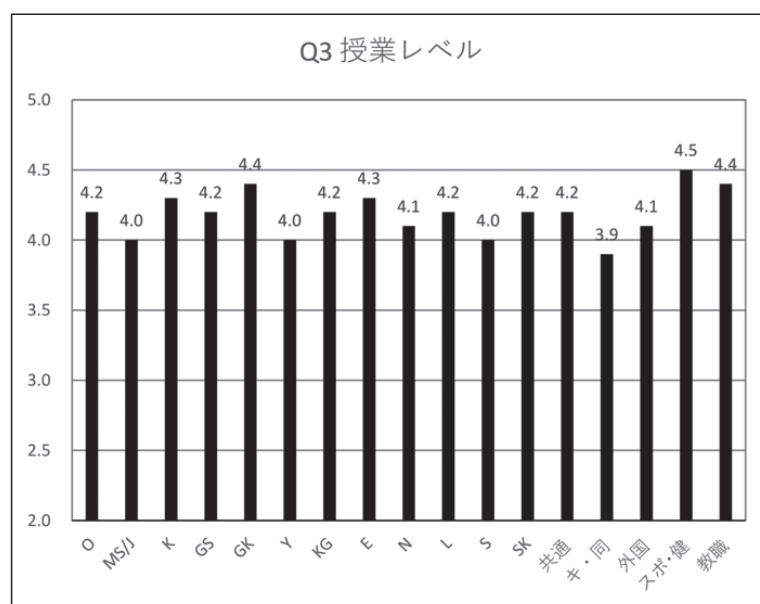


図5. 学科・科目区分の分布（Q 3）

同じ区分の平均値が3.25（2017年度春学期）→ 3.38（2018年度春学期）→ 3.35（2018年度秋学期）と全体としては高止まり傾向にあります。これは学生の理解度を丁寧に確認しながら授業をすすめる工夫をするなど、ひとえに一人ひとりの教員及び各学科・各科目区分で取り組まれた授業改善の成果にほかならないと評価できます。この問題は受講学生の学力レベルと授業目的との難しい関係に依存するところです。特に大人数クラスではレベル調整が困難となるのは必然的です。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

習熟度クラスなどクラス形態の工夫はひとつの方策であると考えられます。そのような中でも現代こども学科（4.4）やスポーツ健康科目（4.5）の高水準は注目されます。改善の方向についてはアクティブ・ラーニング研究会などを通し教員間で一層の情報交換が必要であると思われます。



Q 4. 授業の双方向性

全体結果

「Q 4：教員からの一方向的な授業ではなく、教員と受講生又は 受講生同士の双方向性に工夫がされていましたか」
図 6 の度数分布分析が示す通り、この項目も課題を抱えていることが分かります。

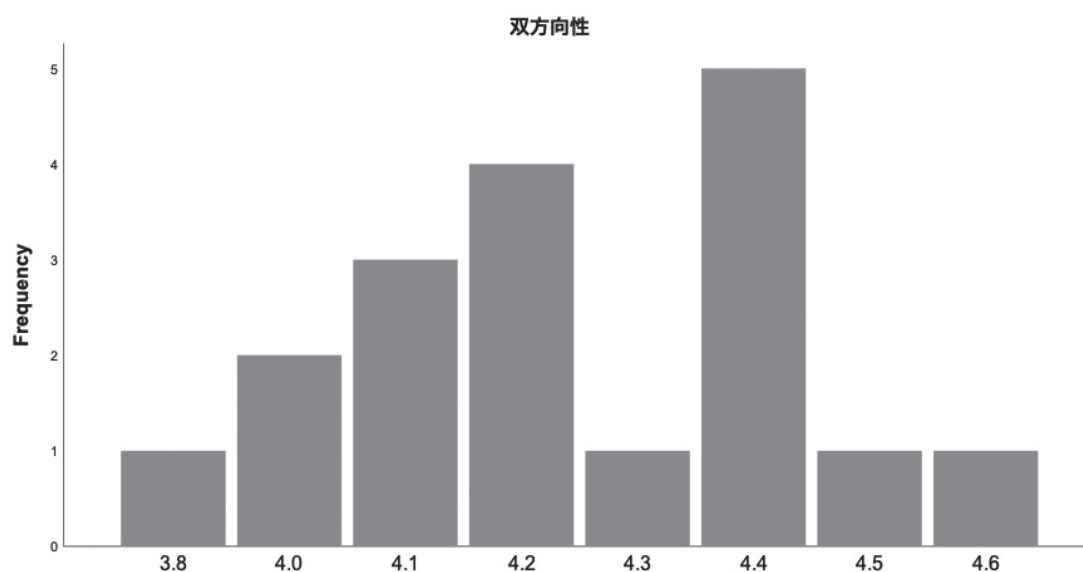
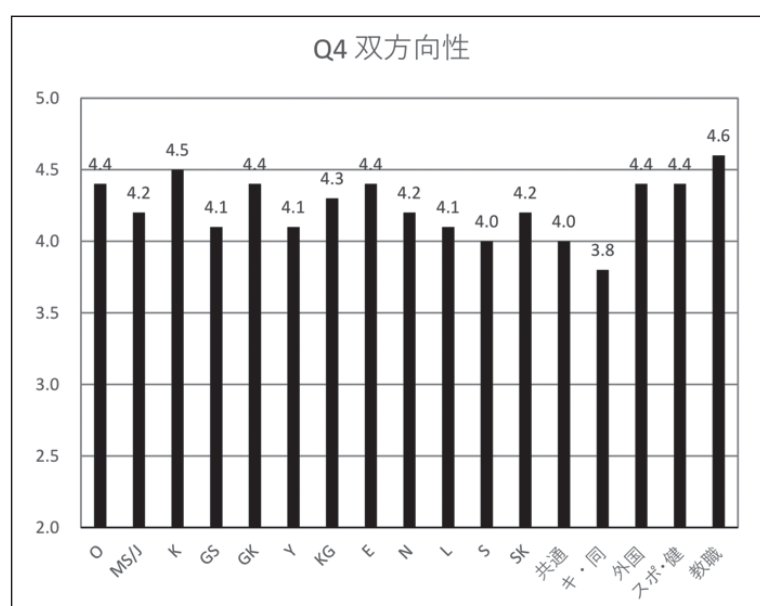


図 6. 学科・科目区分の分布 (Q 4)

同じ区分の平均値が3.24 (2017年度春学期) → 3.31 (2018年度春学期) → 3.35 (2018年度秋学期) と全体としては高水準にあり、全体的な傾向として改善が進んでいると評価できます。双方向性のある授業はアクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。ICT も更に利用しながら一層の向上が望まれるところです。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。特に学科間の相違が大きな項目 (3.8～4.6) となっている点も注視する必要があります。

学科・科目区分コメント

特に、国際教養学科 (4.5) や英語英文学科 (4.4) の高水準が注目されます。スキル演習科目に留まらず、学生間のグループワーク、プレゼンテーションや振り返りなど、アクティブな授業運営がこの双方向性の核になると考えられます。多彩なアクティビティーを準備しながら、学生が授業内で声を発することができる授業デザインが一層必要になると思います。



Q 5. フィードバック

全体結果

「Q 5：提出物に対するフィードバック（採点、添削、マナビーでのコメント、チェック後の返却など）は効果的に行われていましたか」

図7の度数分布分析が示す通り、この項目も学科・科目区分で相違が大きな項目です。

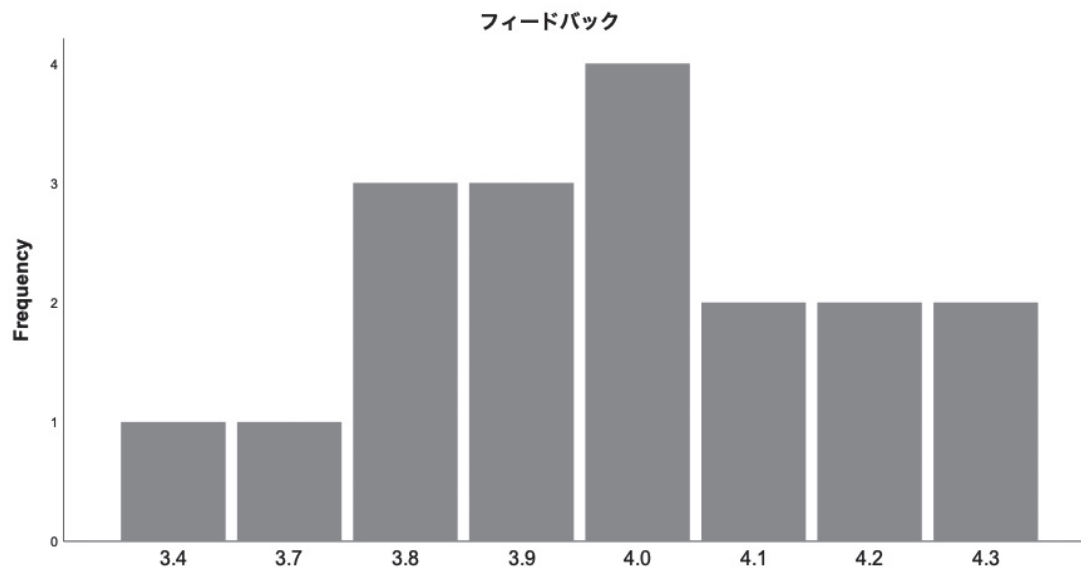
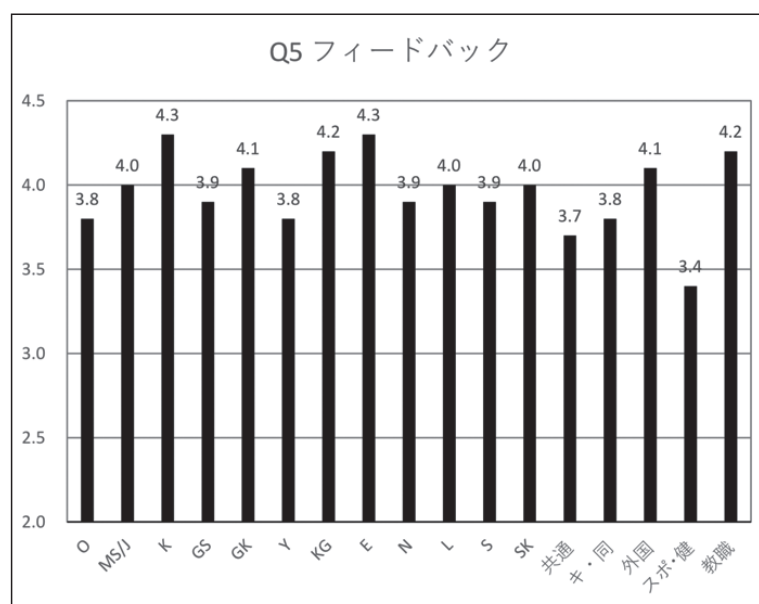


図7. 学科・科目区分の分布（Q 5）

同じ区分の平均値が3.13（2017年度春学期）→ 3.23（2018年度春学期）→ 3.28（2018年度秋学期）と全体としては順調に改善が進んでいると評価できますが、十分とは言えません。フィードバックは、アクティブ・ラーニングの中核をなす重要な要素です。特に、マナビー（LMS）を活用することにより、「課題の提出⇔フィードバック」が効率的にできると思われます。同志社女子大学としてはこの点については最重点項目として「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、看護学科（4.2）の高水準が注目されます。重要なことは「出されたレポートは返す」というシンプルな原理だと思われます。添削などにおいても、学生の書いたもの全てについてフィードバックする必要は必ずしもないのかもしれませんが、むしろ、学生が次へのステップとなるようなポイントを押さえた「選択的な」指摘が効果的であると思われます。教員もエネルギー配分を考え、時間を効率よく使うことが出来ます。



Q 6. 理解を促進する工夫

全体結果

「Q 6：言葉による説明だけでなく受講生の理解を促進する工夫がなされていましたか」

図8の度数分布分析が示す通り、すべての学科・科目区分で平均が4.0を上回っていました。

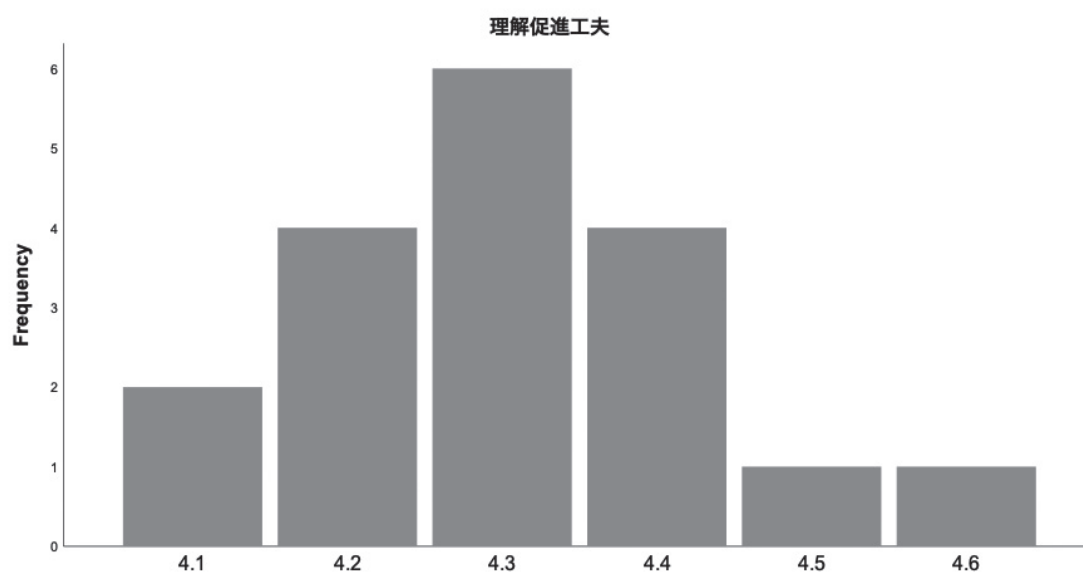
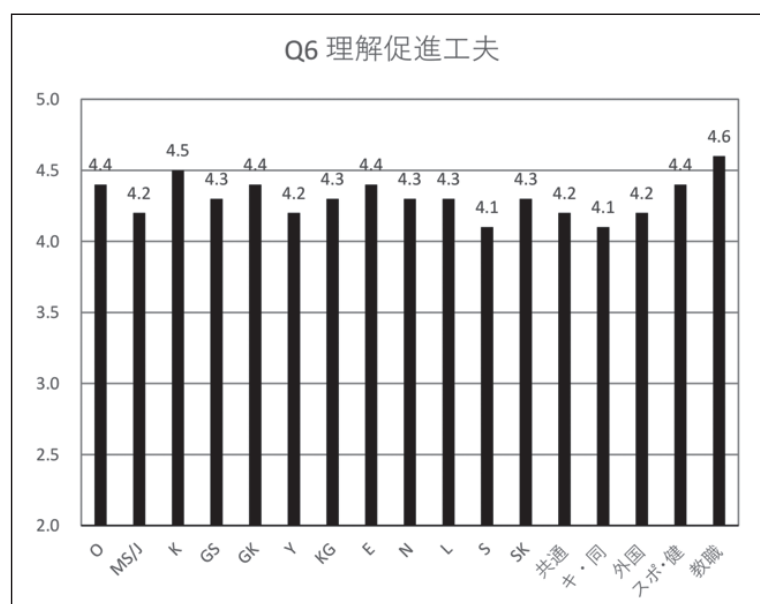


図8. 学科・科目区分の分布（Q 6）

同じ区分の平均値が3.32（2017年度春学期）→ 3.38（2018年度春学期）→ 3.41（今回）と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。これはどちらかというと「当たり前」の質問です。数値が示す通り、どの学科・区分でも、4.0以上の平均が得られ、多様な工夫がなされている姿が目には浮かびます。この点については同志社女子大学としてほぼ「達成できた」ものと考え、今後は質的な議論（どのような工夫）に移行する時期に来ているのではないかと思います。すなわち、具体的にどのような工夫がなされているのか、その工夫を集約して大学として共有してゆく方向性です。

学科・科目区分コメント

作業、制作、資料の提示や配布、映像等による説明、ロールプレイングなど多様な工夫が可能であると思われます。このような創造的な工夫はアクティブ・ラーニング研究会などを通して全学で共有したいものです。特に、音楽学科（4.4）や人間生活学科（4.3）の高水準が注目されます。



Q 7. 自主学習

全体結果

「Q 7：自主学習を促す工夫がなされていましたか」

図9の度数分布分析が示す通り、同志社女子大学として次のQ 9と併せて、自主学習・学習時間は喫緊の課題となっています。

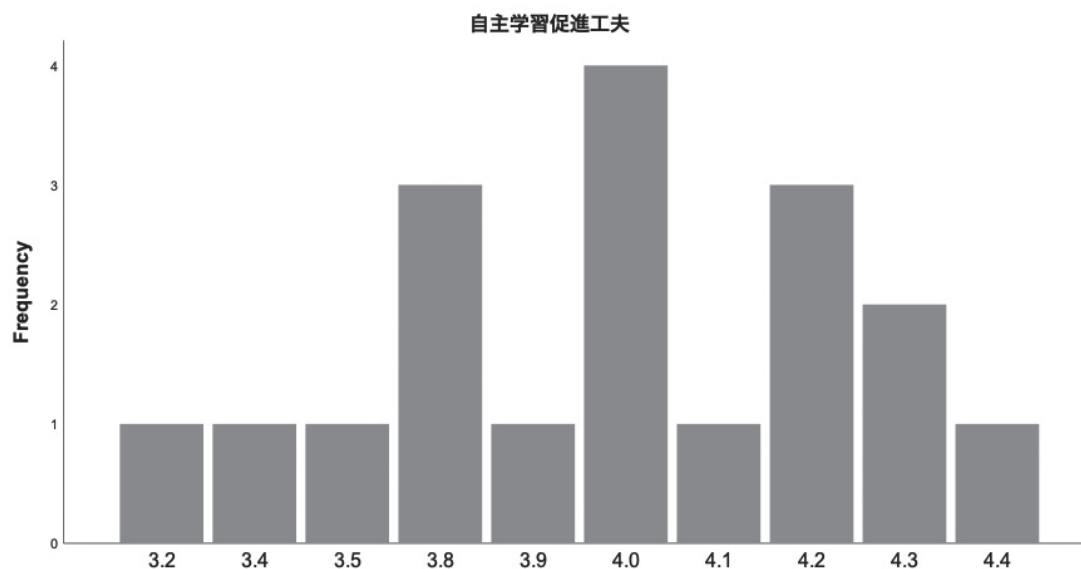


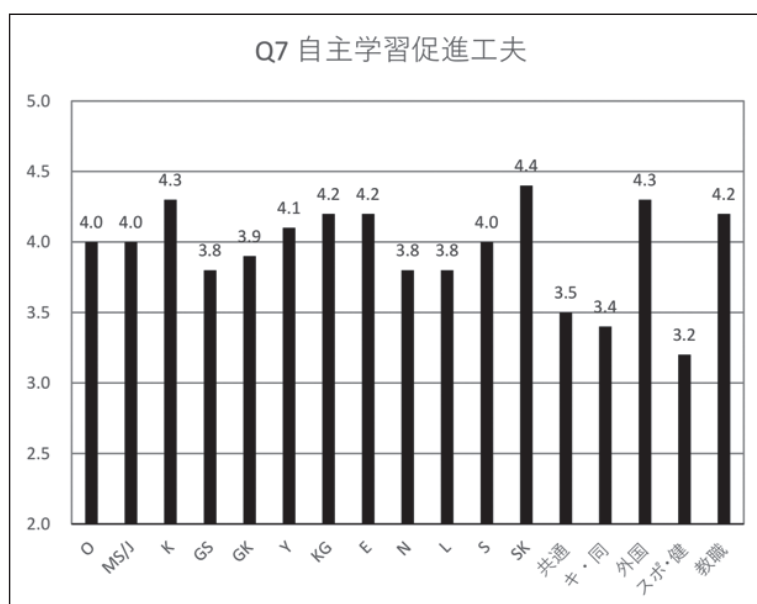
図9. 学科・科目区分の分布 (Q 7)

同じ区分の平均値が3.08 (2017年度春学期) → 3.16 (2018年度春学期) → 3.20 (2018年度秋学期) と全体としては順調に改善が進んでいると評価できます。しかし設定されている項目の中で低い水準にあるのがこの質問です。もちろん、科目群によってはそれほど授業外学習が求められないかもしれません (スポーツ・健康科目群、3.2)。逆に外国語科目群の平均値が比較的高くなっているように (4.3)、復習や予習が必要となるものもあります。同志社女子大学としては自主学習については最重点項目として「継続的に取り組む」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

自主学習時間を増加するために、各学科では苦渋に満ちた取り組みがなされていると思われます。そのような中でも管理栄養士専攻 (4.4) の高水準が目立ちます。

いかに主体的な学習姿勢を習得・維持させるかについて継続的な議論が必要であると思われます。



Q 9. 自主学習

全体結果

「Q 9：この授業の予習、復習、自主学習に1週当たり平均どれくらい時間をかけましたか。」

図10の度数分布分析が示す通り、興味深い結果です。

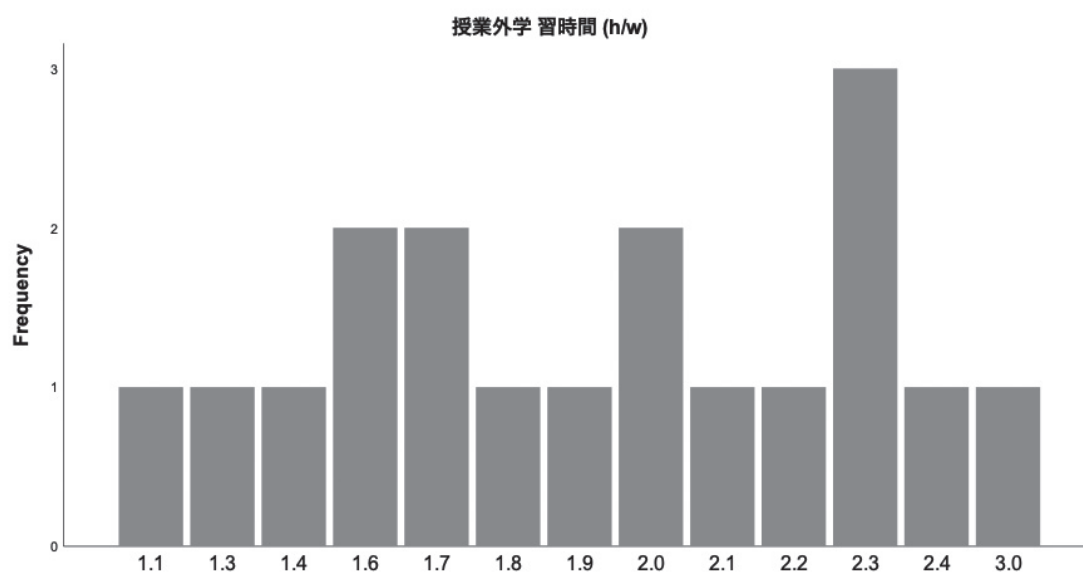
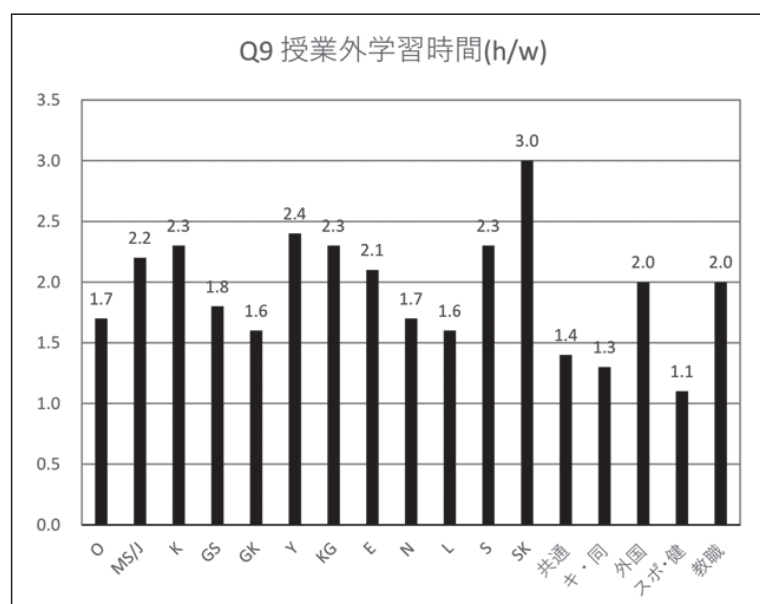


図10. 学科・科目区分の分布 (Q 9)

実際の学習時間に関しては各学科間で大きな相違が見られました。しかし、2018年度秋学期の1週間あたりの総学習時間が平均で「0.82時間」であることからすると、今回は平均が「1.9時間」ですのでほぼ倍増したことになります。にわかには信じがたい結果ですが、もしこれが本当だとすると、喜ばしいことです。設問が1週あたりの学習時間であることから、例えば、半期の上限の24単位（仮に1科目が2単位と設定）の授業科目を受講しているとすると、1週間あたりの総学習時間は、 $1.9 \times 24 \div 2 = 22.8$ 時間、1日に換算すると（土日を除いて）、 $22.8 \div 5 = 4.56$ 時間となります。前回は1.97時間でしたので2倍以上に伸びたことになります。この信憑性については今後の検証を待ちたいところです。

学科・科目区分コメント

特に、医療薬学科 (2.4)、食物科学専攻 (2.3)、メディア創造学科／情報メディア学科 (2.2) で比較的長時間授業外学習に取り組んでいることが注目されます。国家試験であったり、実験やプロジェクトなどに取り組んでいることがその一因であると考えられますが、他の学科にもヒントになる秘訣が隠されているかもしれません。



Q10. 積極性

全体結果

「Q10：あなたはこの授業に関して積極的に意見を述べたり質問をしたりしましたか」

図11の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

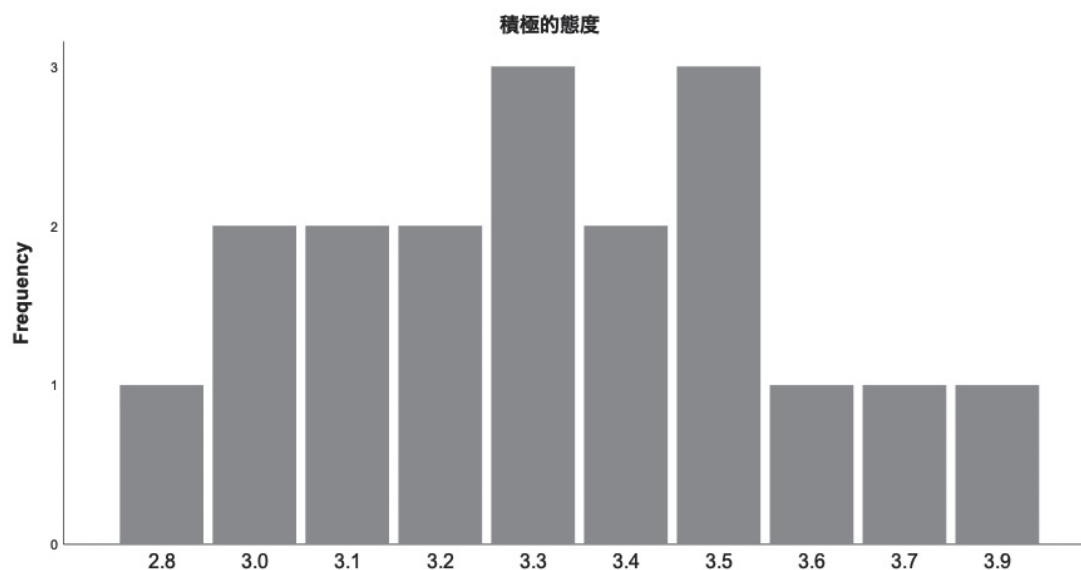
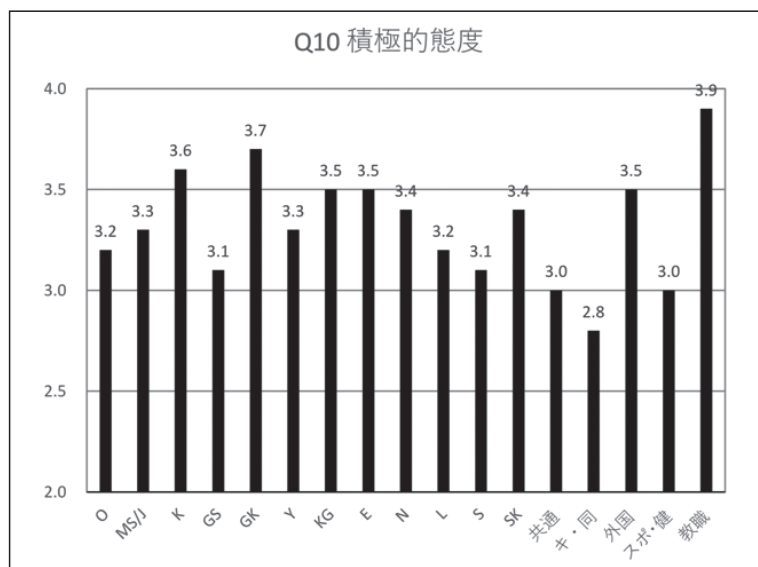


図11. 学科・科目区分の分布（Q10）

同じ区分の平均値が2.39（2017年度春学期）→ 2.51（2018年度春学期）→ 2.61（2018年度秋学期）と全体としては改善が進んでいると評価できます。しかし低い水準にあるのは間違いのないところです。ここからは、教師中心の・教える内容中心の授業が多いことが想像されます。アクティブ・ラーニングに象徴されるように21世紀の教育は「教師中心→学習者中心へ」そして「何を教えたか→何が理解できるようになったか・何ができるようになったのかへ」のパラダイムシフトがポイントです。しかし同志社女子大学ではまだパラダイムシフトは不発のようです。これは大学というよりはむしろ学生の意識がそのように変わっていないことにも問題はあります。同志社女子大学としてはこの点について、「最重点項目」として継続的に取り組んでゆく必要があると思います。

学科・科目区分コメント

特に、教職に関する科目（3.9）が高水準であることが注目されます。



Q11. 授業や関連分野への意欲

全体結果

「Q11：あなたはこの授業の分野又は関連分野の学習をさらに深めたいですか」

図12の度数分布分析が示す通りですが、今後、どの分野においても就職後も継続的に新しい知識や技術が要求されることが考えられます。このことから、在学中から関連分野の学習をさらに進めたいと思えるような授業の工夫が必要と考えられます。

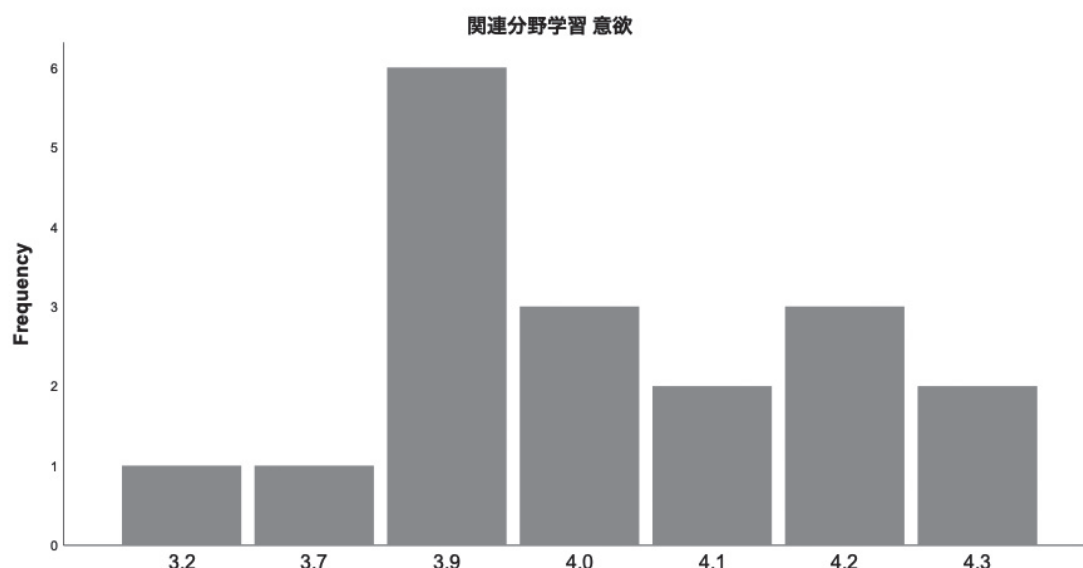
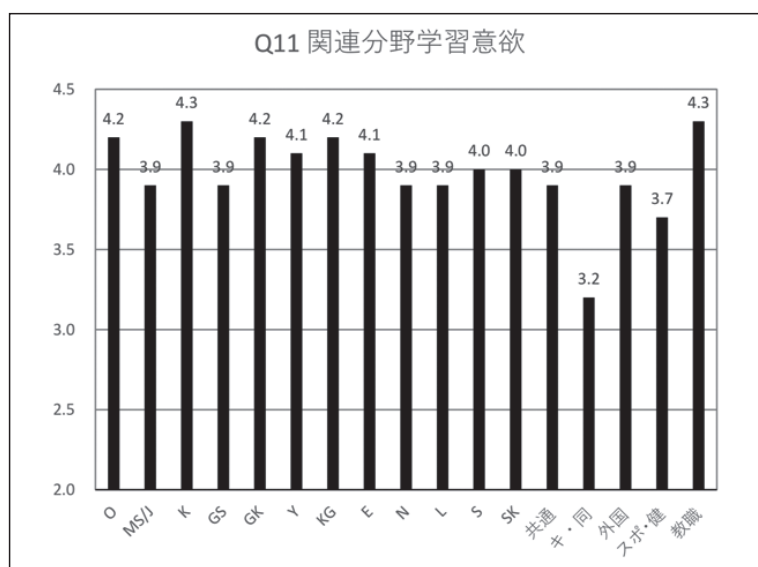


図12. 学科・科目区分の分布（Q11）

学科・科目区分コメント

同じ区分の平均値が3.06（2017年度春学期）→ 3.14（2018年度春学期）→ 3.16（2018年度秋学期）と全体としては順調に推移していると評価できます。一方で、キリスト教・同志社関係科目に関しては、全学科共通の理念を学ぶための必修科目であるため、相対的に低くなることは致し方ない結果であると思われます。むしろ各学科の授業においても積極的に建学の精神やキリスト教主義への関連性を示唆することが必要なのかもしれません。また専門性を一層深めるとともに関連分野についての興味関心を深めるため、どの授業においても配布されている参考文献一覧にひと工夫凝らすことも考えられると思います。例えば、一覧表を提示するだけでなく、実際の参考文献を時々授業で紹介することも効果的かもしれません。同志社女子大学としてはこの点について引き続き「改善につとめてゆく」必要があると思います。



Q13. 到達目標達成への指導

全体結果

「Q13：到達目標を達成しやすいように指導がなされていましたか」

図13の度数分布分析が示す通り、学科・科目区分で相違が大きな項目です。

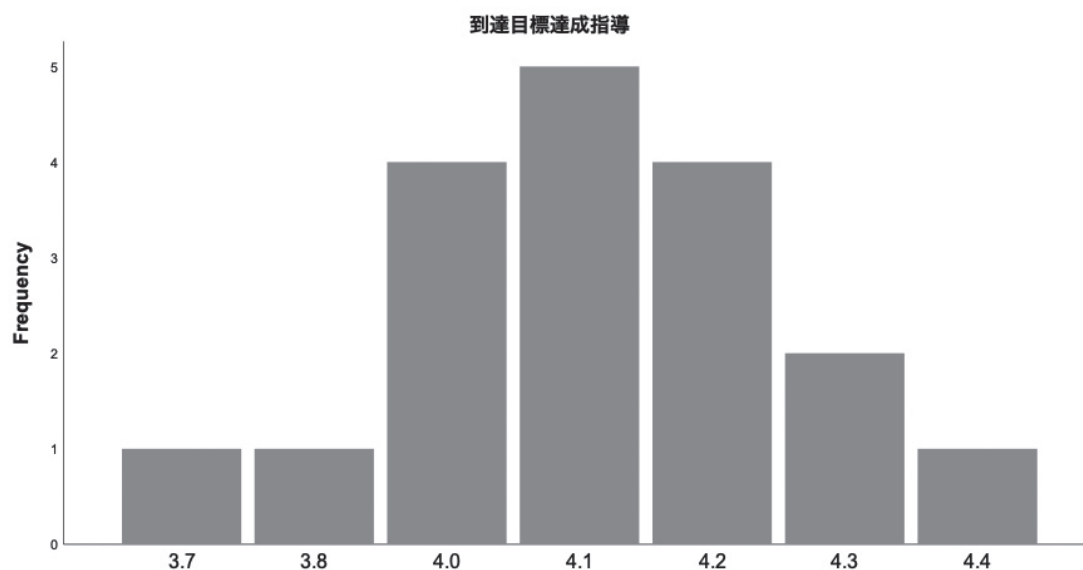
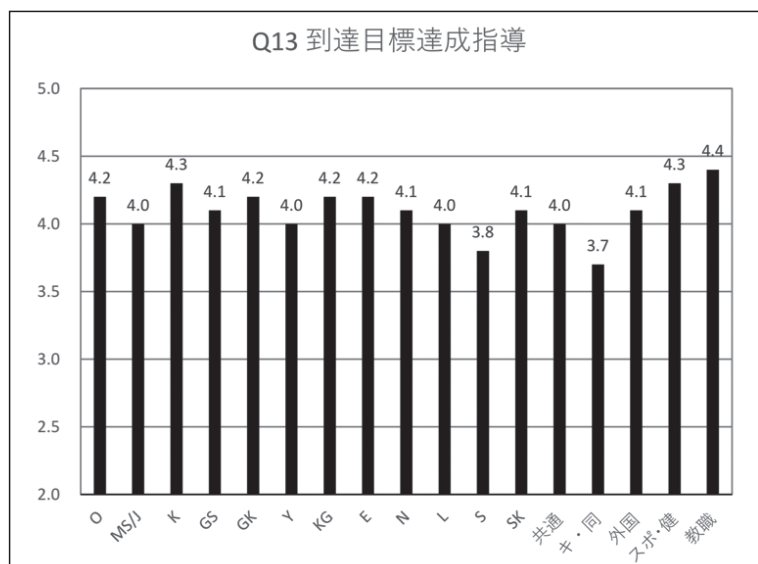


図13. 学科・科目区分の分布（Q13）

同じ区分の平均値が3.26（2017年度春学期）→ 3.33（2018年度春学期）→ 3.37（2018年度秋学期）、など好転傾向にあります。これらはいわば授業実施に関するQ 1～7の工夫や取り組みの成果が現れているものと考えられます。同志社女子大学としてはこの点については、最重点項目として今後も「改善につとめてゆく」必要があると思います。

学科・科目区分コメント

一人ひとりの学生と時間をかけて向き合う姿勢が必要となる項目だと考えられます。そのような中でも、多様な言語を扱う外国語科目（4.1）が高水準にあることが注目されます。



Q14. 到達目標達成

全体結果

「Q14：あなたは到達目標を達成できたと思いますか」

図14の度数分布分析が示す通りですが、不思議なことにQ13同様、正規分布のような分散になっています(学科・科目区分で相違が大きい)。

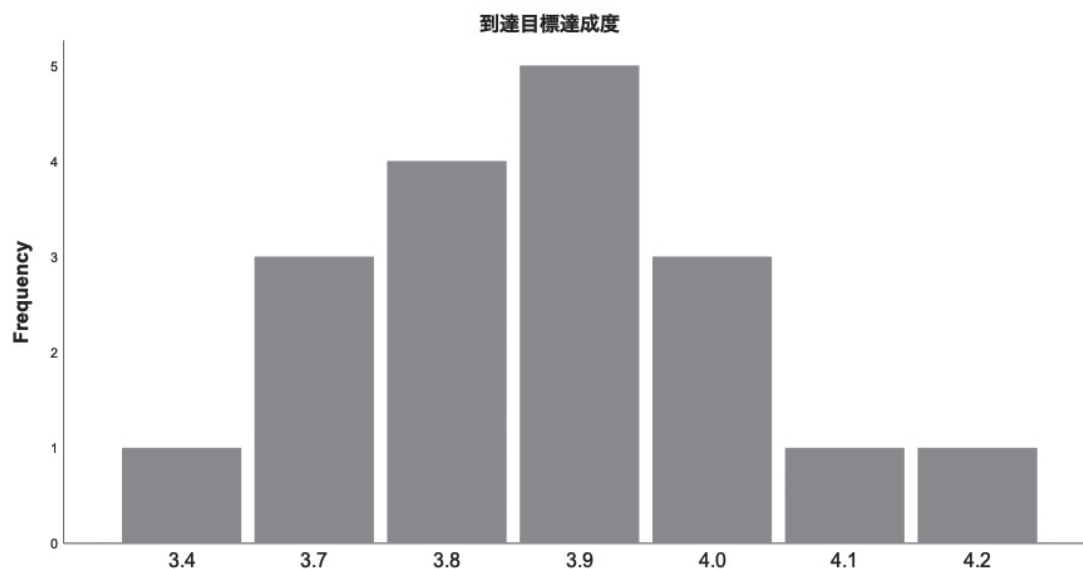


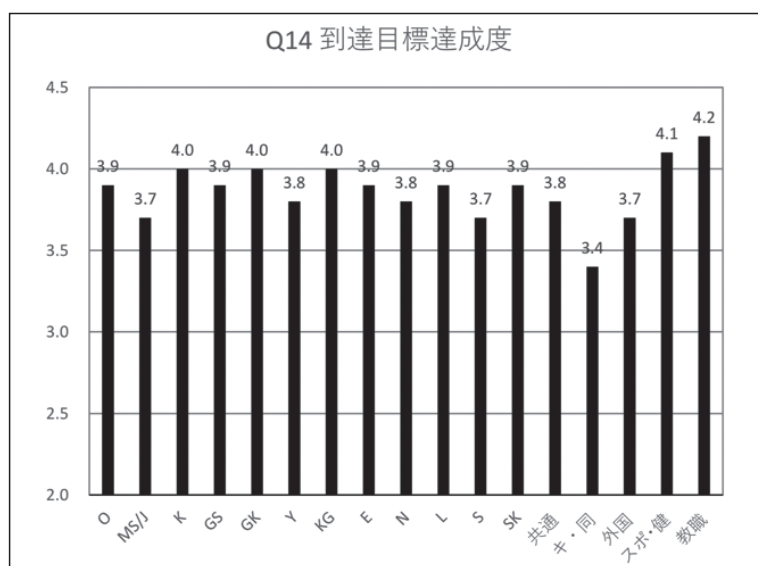
図14. 学科・科目区分の分布 (Q14)

同じ区分の平均値が3.06 (2017年度春学期) → 3.15 (2018年度春学期) → 3.21 (2018年度秋学期)、と全体としては順調に推移していると評価できます。

学科・科目区分コメント

学科・科目区分で比較してみると、教職に関する科目 (4.2)、スポーツ・健康科目 (4.1)、国際教養学科 (4.0)、看護学科 (4.0) など、到達目標を比較的設定しやすい学科とキリスト教・同志社関連科目 (3.4) のように設定に工夫が必要な科目区分もあるようです。

また日本人特有の自己評価の低さという問題、学生自身が控えめで達成度を過小に評価する傾向があるのかもしれませんが、例えば、科目の達成目標—1つ1つの授業の達成目標の明確化、科目にもよりますが小テストなどの形成的評価の機会を多く持つなど、達成度が明確に分かるような仕組みも一層必要であるように思います。



Q15. DWCLA10

全体結果

「Q15：DWCLA10の内、この授業の履修を通して その獲得や向上に役立ったと感じられるものを すべて選んでください」

この点については経年変化は算出しづらい部分がありますので、2019年度春学期の特徴を、図15を参照しながら見ておきたいと思います。

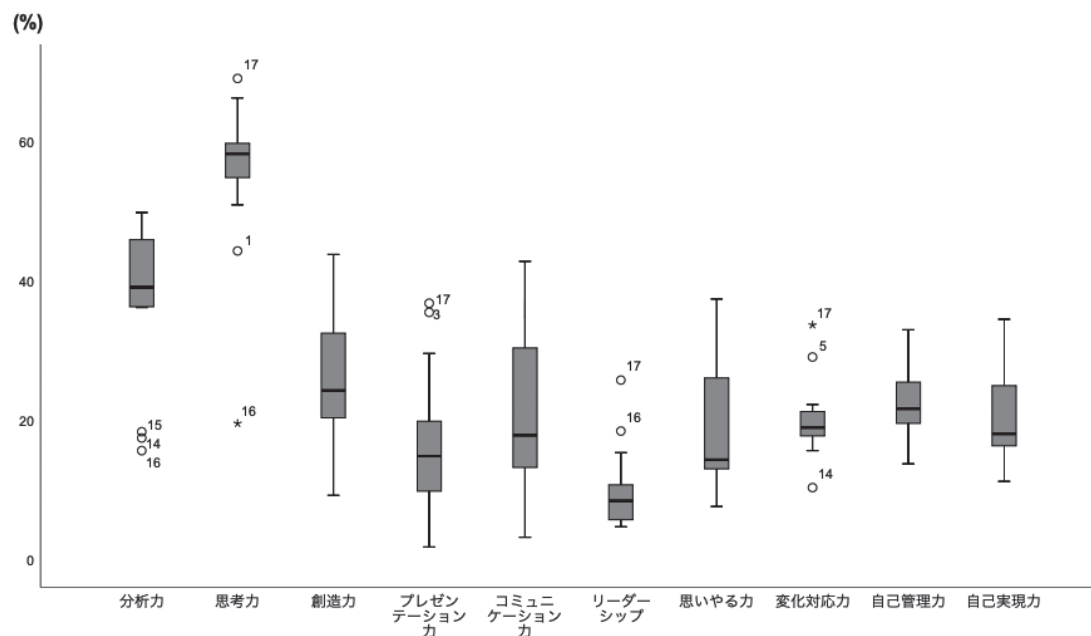


図15. 学科・科目区分の分布 (DWCLA 10)

DWCLA10の中で最も選択率の高かった項目は、1位) 思考力 (49.6% [2018年度秋学期、以下同様] →56.1%)、2位) 分析力 (31.4%→37.3%)、3位) コミュニケーション力 (16.5%→20.3%)、逆に低かった項目は、10位) リーダーシップ (3.4%→8.6%)、9位) プレゼンテーション力 (前年度データ欠損→15.1%)、3位) 思いやる力 (8.1%→16.0%) でした。それぞれ上位も下位も%が2018年度秋学期と比較して上昇しているのが特徴です。

また、大学としては思考分析力が上位を占めているというのは妥当であるように思います。DWCLA10が出来てかなりの年月が経ちますが、一方でこの項目の再検討が必要な時期にきているのかもしれません。例えば、創造力に含まれるのかもしれませんが、アントレプレナーシップ (起業家精神) に関連して「問題発見能力」は大学において育成すべき重要な項目であろうと考えられます。問題を教員が設定しているだけでは、リーダーシップも自己管理能力も自己実現力も身につけません。

まとめ

44,292名（延べ回答者数；2018年度秋学期は45,203名）という膨大な数字が示す通り、いまや巨大プロジェクトとなった観すらする授業アンケート。ここまで読み進めて頂きありがとうございました。

結果分析を見られてどのような感想を持たれたでしょうか？ひとつ確かなことは、全体として同志社女子大学がよい方向に向かっている姿が浮き彫りになってきていることだと思います。

また、大学としてほぼ達成できた項目と今後力を注ぐべき点が明確になってきています。

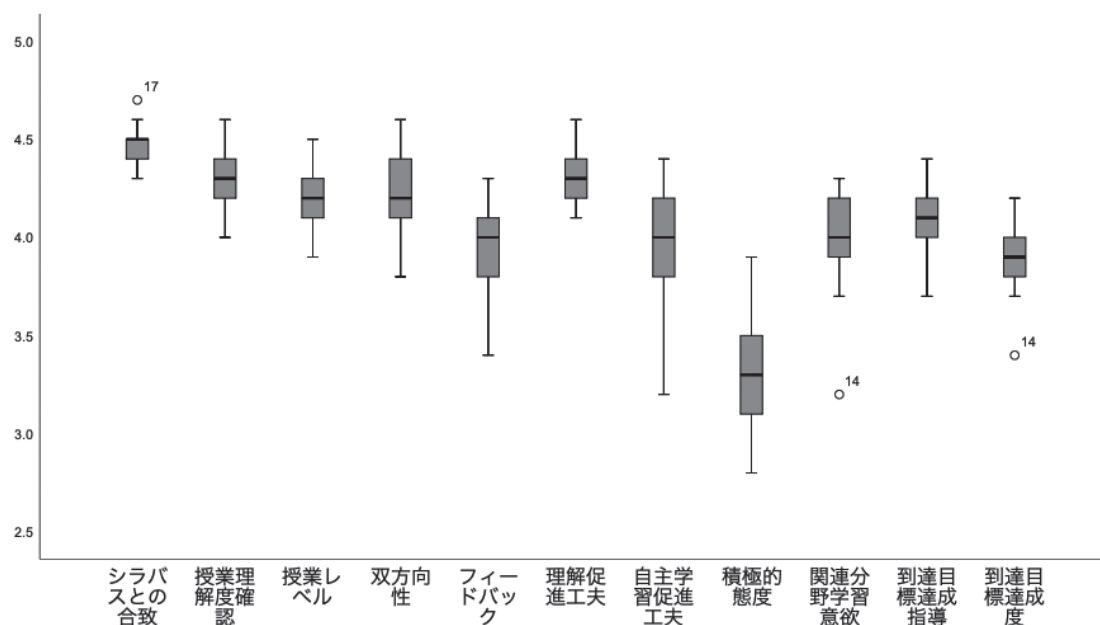


図16. 授業アンケートの箱ひげ図 (Boxplot)

図16が示す通り、同志社女子大学として「今後重点的に取り組むべき項目」「引き続き改善に努めてゆく項目」「ほぼ達成出来た項目」の3つのグループに分類することができると思います。

1. 今後重点的に取り組むべき項目

- 積極的に意見を述べる態度 (Q10)
- 効果的なフィードバック (Q5)
- 自主学習の促進 (Q7、9)

2. 引き続き改善に努めてゆく項目

- 授業の双方向性 (Q4)
- 到達目標達成への指導 (Q13)
- 到達目標達成 (Q14)
- 授業レベルとの合致 (Q3)
- 授業の工夫 (Q8)
- 授業や関連分野への意欲 (Q11)
- 履修理由の自己選択化 (Q12)
- DWCLA10 (Q15)

3. ほぼ達成出来た項目

- シラバスと授業の合致 (Q1)
- 理解を促進する工夫 (Q6)
- 受講生の理解度を確認しながらの授業展開 (Q2)

一方で総評を通していくつかの問題点も明らかになってきています。

- A) 実施率の向上。まずは紙ベースの授業アンケートの実施率まで回復する必要があります。この方法については先にも述べたように教員のコンピューター・リテラシー向上だけでなく、アナログ的なものも組み合わせた対策を考える必要有り。
- B) データの蓄積を生かし切れているとは言えません。この点については過去10年間程度のデータを分析し、授業改善の方向性を探る必要があります。またその分析の際には探索的因子分析（EFA）や相関関係など統計分析の手法も活用することが求められると思います。これまでの膨大なデータから授業改善の方向性も見えてくると期待されます。これについては大学に統計やIRの専門職を配置する必要有り。
- C) 質問項目の再検討が必要。DWCLA10の項目など質問項目の修正や入れ替えなどをしてゆく必要有り。

今後は、以上のような問題点の改善にも努めながら、既に達成した項目は削除しながら、重点的に取り組むべき項目に注視する必要があります。

Wiggins and McTighe を引用し、西岡（2008）は「教育によって最終的にもたらされる結果から遡って教育を設計する」「逆向き設計」の重要性を主張しています。今、まさに私達も、種類は異なるものの、この授業アンケートという「教育結果」をもとに新しい「授業デザイン」「カリキュラムデザイン」の設計が求められているのではないのでしょうか。

一般的に、授業アンケートは授業をした後の「結果」に過ぎないと思われがちですが、「次のスタート」のための示唆を多く含んでいます。そのためにも、自分自身の授業アンケート結果（ミクロな視点）と同時に学科や大学、ひいては21世紀の教育の方向性（マクロな視点）を考え合わせる時期に来ているのだと思います。

教師は「社会と時代のパイオニア」（天野正輝、1983、Personal communication）でなければならないと思います。そのためには、私達も年々授業を変革することに迫られています。容易ならざることですが、そこに教育のダイナミズムと醍醐味があるのも事実です。あらたなアイデアを試みることを恐れず、常にパイオニア精神を持ち続けながら、今後も、授業のPDCA サイクルを意識し、同志社女子大学の新しい授業を創り出してゆくことが求められていると思います。

参考文献：

西岡加名恵（2008）『逆向き設計で確かな学力を保証する』東京：明治図書

<凡例>

掲載グラフにおける各学科・科目区分の略称は以下の学科等を表している。

O	音楽学科科目	L	人間生活学科科目
MS/J	メディア創造学科／情報メディア学科科目	S	食物栄養科学科食物科学専攻科目
K	国際教養学科科目	S K	食物栄養科学科管理栄養士専攻科目
G S	社会システム学科科目	共通	共通学芸科目
G K	現代こども学科科目	キ・同	キリスト教・同志社関係科目
Y	医療薬学科科目	外国	外国語科目
K G	看護学科科目	スポ・健	スポーツ・健康科目
E	英語英文学科科目	教職	教職科目
N	日本語日本文学科科目		

◆ラーニング・コモンズ 利用報告◆

今出川キャンパス楽真館には2017年9月に、京田辺キャンパス聡恵館には2018年4月に、ラーニング・コモンズを開設しました。複数のエリアからなるこの施設は、各種イベントの開催のほか、グループ学習やプレゼンテーションの練習など、様々な形で活用され、学生たちの創造的学習空間の拠点となっています。

1. 2019年度 イベント実施状況

◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・コモンズ

月	イベント名
4月	新入生のための図書館オリエンテーション
	薬学部 オリエンテーション
	キャリア・資格取得支援講座募集説明会
	現代こども学科 講演会
	国際課主催 留学英語基礎講座
5月	合同図書館オリエンテーション
	2019年度オープンキャンパススタッフ・プロモーション委員会合同募集説明会
	国際課主催 留学英語基礎講座（毎週月・木曜日）
	メディア創造学科企画 對馬隆介氏講演会
	現代こども学科主催 普賢寺小学校 大学体験学習会
	宗教部主催 手話教室（春学期6回、秋学期6回）
	新規LC スタッフ募集説明会
	アナログゲームワークショップ
6月	まちづくり委員会主催 京田辺市国際交流プロモーター事業イベント
	同志社女子大学ダンス部ラウンジ公演
	メディア創造学会プロジェクト「gamic +」イベント デジピック～eスポーツフェスティバル～
	キャリアカフェ
	関口ゼミ ブライダルプロジェクト発表会
	教員主催 関西大学・佛教大学・同志社女子大学合同ゼミ
7月	キャリアカフェ
	メディア創造学科講演茶話会
	ギャラリー展示 メディア創造学科企画展「Brian Kwok 香港ネオンサイン展」
	メディア創造学科主催 香港のネオンサイン・体験ワークショップ
	社会システム学科講演会 Window on the philippins Roundtable Discussion
	メディア創造学科主催 映像撮影ワークショップ
	ワンダフル大学院 演劇発表イベント

月	イベント名
7月	1年次生対象博物館学芸員・図書館司書説明会
	メディア創造学会プロジェクト「gamic+」イベント デジピック～eスポーツフェスティバル～
	授業「演劇表現演習」成果発表
	キャリアカフェ「印象アップセミナー」
	国際教養学科2回生ポスターセッション
	授業「ミュージックセラピー実習Ⅰ・Ⅲ」合同実習報告会
	授業「メディア創造学科基礎演習C」成果発表会
	授業「メディア創造基礎演習A」合同茶話会
9月	キャリア・資格取得支援講座募集説明会
	ギャラリー展示 ハイブリッド・ハイネ「イデーエル ル・グラン書」リデザイン作品合同展示会『コトノハ』
	国際教養学科3年次生留学報告会
10月	メディア創造学科講演会
	キャリアカフェ
	キャリアガイダンス
	48hour film project
	授業「プロジェクト演習Ⅱ」プログラミングワークショップ（三山木小学校・ワンダフル大学院）
11月	ギャラリー展示「「いつか」を見つめて」
	第1回 読書会 by 京田辺図書館
	ギャラリー展示 メディア創造学科学生 卒業制作展
	ギャラリー展示「TYPE RESET Exhibition vol.001 言葉と文字」
	キャリアカフェ
12月	こどバ14th
	メディア創造学科学生作品「アゲイン」上映会
	JACET Oral Communication Festival
	48hour film project 上映会
	CASE 講演会
	2020年度 AO 方式入学者選抜合格者集合学習
1月	キャリアカフェ
	翼プロジェクト主催 留学座談会
	ギャラリー展示「SORANPO air line」
	プロジェクト演習・インターンシップ報告会
2月	社会システム学科卒業研究発表会
	メディア創造学科ポスターセッション

月	イベント名
2月	上田信行先生 最終講義 第二会場
	現代こども学科「インターンシップⅡ」最終報告会
	メディア創造学科進級制作展
	探究塾（啓林館・大黒ゼミ共催）成果発表会
	第13回アクティブ・ラーニング研究会

◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・コモンズ

月	イベント名
4月	LC STAFF 主催 新入生歓迎ウィーク
	キャリア支援部 資格取得支援講座 募集説明会
	キャリア支援部 海外インターンシップ説明会
	プロモーション委員会 新歓トークショー
	国際課 アジア中長期留学生受入れプログラム 歓迎会
5月	オープンキャンパススタッフ・プロモーション 委員会 募集説明会
	国際課 協定大学の担当者による留学説明会（計4回）
	今出川 LC STAFF 新規 LC STAFF 募集説明会（計6回）
	京炎そでふれ！花風姿 新歓プレゼンテーション
	国際課 2019年度日本語集中講座（JLIC）A ターム歓迎会
	能楽部 新歓コンサート
	英語英文学科 AES Poster Presentation 2019
6月	高大連携課 教員対象進学説明会
	キャリア支援部 公務員ガイダンス
	国際課 2019年度 日本語集中講座Aターム 送別会
	キャリア支援部 キャリアカフェ（計8回）
	オープンギャラリー展示『同志社女子大学生生活科学大会』
	ダンス部 AmistaD2 ダンス公演
	国際課 2019年度 日本語集中講座Bターム 歓迎会
7月	被服学研究室『WHITE WORK 2019』
	N プロ 小公演
	今出川図書館 図書館 AV ライブラリー出張上映会
	英語英文学科 ポスターセッション
	国際課 2019年度 日本語集中講座Bターム 送別会

月	イベント名
7月	社会システム学科 シェアダイニング ワークショップ
	オープンギャラリー展示『Digital Colouring』
	オープンギャラリー展示『人間生活学基礎演習 今出川キャンパス案内』
	キャリア支援部 ワコール印象管理セミナー
	英語英文学科 SP (Summer Project) Presentation
8月	生活科学部 生化学ゼミ リユニオン
9月	国際課 2019年度秋学期 JSP・中長期留学生受入れプログラム歓迎会
	キャリア支援部 資格取得支援講座 募集説明会
	オープンギャラリー展示『人間生活学科公開講演会』
10月	オープンギャラリー展示『表象文化フェスティバル企画』
	オープンギャラリー展示『秋学期新規 LC STAFF 募集について』
	表象文化フェスティバル ミニ上映会 (計4回)
	広報課 第7回《Vine》講座
	高大連携課 入試対策講座
	表象文化フェスティバル パフォーマンス「鎌倉文学旅行記」
	食物科学専攻 インターンシップⅡ合同報告会
	公衆栄養学研究室学生 アプリインストールのお願い
	表象文化フェスティバル プチコンサート
	LC STAFF 主催 座談会「話し上手になりましょう」
	表象文化フェスティバル 森見登美彦×京都マップ展示
	表象文化フェスティバル 「〇〇で遊ぶ」(演劇関連のパフォーマンス)
	表象文化フェスティバル PR 映像 (計14日間)
	表象文化フェスティバル こむらさき展示
	表象文化フェスティバル my 留学生活 in the US
	表象文化フェスティバル 周防正行監督作品を学ぶ
	表象文化フェスティバル ミニ上映会「ワカモト研究室の10年間」
	学生支援課 EVE 祭トークショーチケット販売
	表象文化フェスティバル パフォーマンス「映画音楽演奏」
11月	広報課 ホームカミングデー
	表象文化フェスティバル ミニ上映会「日本語教授法関係 VTR」
	表象文化フェスティバル 台湾 DVD 上映・展示
	表象文化フェスティバル 展示『日本語教科書展示』
	被服学研究室 展示『DRESS COAD』

月	イベント名
11月	表象文化フェスティバル N プロ小公演
	表象文化フェスティバル 俳句の世界を映像化してみるワークショップ
	表象文化フェスティバル 映画音楽演奏
	表象文化フェスティバル 英語って難しいよなー若ゼミ動きますー
	表象文化フェスティバル 宝塚歌劇で舞台化された小説展示
	表象文化フェスティバル 同志社交響楽団による演奏
	表象文化フェスティバル 「〇〇で遊ぶ」(演劇関連のパフォーマンス)
	表象文化フェスティバル 推し愛♡グランプリ～推しへの愛を競う4日間
	表象文化フェスティバル 若本ゼミ3年次パフォーマンス
	オープンギャラリー展示『# LDK # 4人家族』
	表象文化フェスティバル 上映会・監督トークイベント
	EVE 祭
12月	表象文化フェスティバル ジェンダーに関するワークショップ(計4回)
	表象文化フェスティバル トークセッション
	食物栄養科学科 特別講義
	表象文化フェスティバル パフォーマンス「クリスマス朗読会」
	英語英文学科 Speaking Contest
	表象文化フェスティバル 茶道ワークショップ
	英語英文学科 Pecha-Kucha Inspired
	国際課 2019年度 JSP 送別会
	学術研究支援課 女性のための起業家セミナー
	現代社会学部 中国語スピーチコンテスト
	表象文化フェスティバル クロージングイベント
	英語英文学科 Academic Skills 発表会
1月	来栖史江先生 授業 朗読発表会「3分間朗読」(計3日間)
	若本夏美先生 授業内容発表(第二言語習得論Ⅱ)
	オープンギャラリー展示『人間生活学科卒業発表会ポスター』
	メディア創造学科 志プロジェクト発表会
	被服学研究室 展示『HIHUKU 展』
2月	Medlock ゼミ パフォーマンス
	小林賢章先生 最終講義の茶話会
3月	若本夏美ゼミ 若ゼミ20th
	若本夏美先生 全若本ゼミ同窓会(第3回 Waka の Wakka)

2. 2019年度 月ごとの平均利用者数

◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・コモンズ

月	1日延べ利用者数平均	2018年度実績	前年度比
4月	432.97	432.25	± 0 %
5月	625	771.14	-19%
6月	757.28	657.68	15%
7月	1027.9	806.16	28%
8月	106.37	101.84	4%
9月	279.4	170	64%
10月	595.86	607.83	-2 %
11月	653.17	699.83	-7 %
12月	524.47	533.65	-2 %
1月	593.97	659.35	-10%

(人／日)

◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・コモンズ

月	1日延べ利用者数平均	2018年度実績	前年度比
4月	281.34	386.74	37%
5月	398.47	507.29	27%
6月	396.79	355.42	-10%
7月	622.9	581.43	-7 %
8月	101.9	170.3	67%
9月	181.03	184.63	2%
10月	374.9	412.13	10%
11月	426.45	473.52	11%
12月	388.87	505.26	30%
1月	495.2	633.32	28%

(人／日)

3. 2019年度 ICT 機器貸出件数集計

◇京田辺キャンパス 聡恵館ラーニング・コモンズ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
ノート PC	430	958	1129	1651	128	244	966	1249	1027	961
マウスセット	198	415	563	809	73	117	438	668	526	446
変換アダプタ	5	7	14	11	2	1	5	6	5	9
ディスクドライブ	7	36	22	18	1	11	30	11	12	8
ヘッドホン	29	45	48	92	6	9	64	22	37	33
ヘッドセット	1	1	1	1	1	0	0	0	0	0
IC レコーダー	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
プロジェクター	0	0	0	1	0	1	2	0	0	0
スクリーン	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
デジタル一眼カメラ	0	0	0	0	0	0	2	0	0	1
ビデオカメラ・microSD	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0
ビデオカメラ用マイク	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0
三脚	0	0	0	0	0	0	2	2	1	0
レーザーポインター	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
BD プレイヤー	0	1	2	5	1	3	3	0	2	0
デジタルペーパー	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
電子黒板キット	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
延長コード	0	2	1	6	2	2	7	13	7	9
教材提示装置	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0
スタディブース用										
ケーブル	0	2	0	1	0	0	3	0	0	0
スタディールーム用										
リモコン・ケーブル	2	1	5	4	3	0	1	3	7	3
インフォダイナー用										
リモコン・ケーブル	3	6	5	3	3	0	3	2	0	2
その他	0	1	2	1	0	2	5	1	0	0

◇今出川キャンパス 楽真館ラーニング・コモンズ

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
ノート PC	265	499	604	997	157	210	516	752	666	671
PC 用ディスクドライブ	0	1	5	0	0	2	3	1	1	4
プロジェクター ※リモコン・ケーブル セット含む	1	5	9	9	7	3	10	5	8	11
ヘッドセット・ヘッド ホン	8	19	17	12	0	5	11	11	6	8
ビデオカメラ・カメラ	0	0	1	0	2	0	0	0	0	0
BD プレイヤー	0	0	0	2	0	0	1	0	2	7
IC レコーダー	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
レーザーポインター	0	0	0	3	3	0	1	1	0	1
教材提示装置	0	0	0	2	0	0	0	0	0	1

◆ FD 活動報告（2019年度）◆

1. 本学 FD 関連事業

月	内容
5月	・2019年度春学期授業に関するアンケート実施案内
6月	・2018年度秋学期成績統計資料配布
7月	・2019年度春学期（授業期間内開講科目）授業に関するアンケート実施 【実施期間：7月10日（水）～8月8日（木）】
8月	・2019年度春学期（授業期間外開講科目）授業に関するアンケート実施 【実施期間：8月19日（月）～9月14日（土）】
9月	・2019年度春学期授業に関するアンケート実施結果配付
10月	・2019年度春学期授業に関するアンケート 授業振り返りシートの提出 ・2019年度秋学期授業に関するアンケート実施案内 ・2019年度 FD 講習会 開催 [参加者：教員144名、職員3名]
11月	・2019年度春学期成績統計資料配布
12月	・2019年度春学期授業に関するアンケート実施結果公開（本学ホームページ）
1月	・2019年度秋学期授業に関するアンケート実施 【実施機関：2020年1月7日（月）～1月25日（金）】 ・第12回アクティブ・ラーニング研究会 開催 [参加者：教員124名、職員2名]
2月	・第13回アクティブ・ラーニング研究会 開催予定 →新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、開催延期
3月	・2019年度秋学期授業に関するアンケート実施結果配付 ・2019年度秋学期授業に関するアンケート 授業振り返りシートの提出 ・2019年度 FD レポート第13号発行

2. 学外における FD 関連セミナー等案内及び参加者一覧

2019年度は、以下のとおり学外で開催された FD 関連セミナー等について教職員に向けて周知を行い、幅広い学部から参加がありました。

月	セミナー名・テーマ	主催	参加者
5月	2019年度大学評価（認証評価）評価者研修セミナー	公益財団法人 大学基準協会	鈴木健司（学芸学部）
6月	New Education Expo	New Education Expo 実行委員会	—
7月	高・大・社接続を見据えた大学英語4技能教育セミナー	株式会社 ベネッセ i-Career	谷直之（教務部長）、職員1名
	第47回言語教授法・カリキュラム開発研究会 全体研究会 —スマホ・AI の活用による外国語授業	甲南大学 国際言語文化センター	—
	HU 高等教育研究センター 2019年度第1回公開講演会 —学生支援型 IR の先駆的取り組み	兵庫大学・兵庫大学短期大学部 高等教育研究センター	—
	2019年度 IR フォーラム—変革する大学！	大学コンソーシアム京都・株式会社リアセック	—
8月	第4回 関西教育 ICT 展	一般社団法人日本教育情報化振興会、一般社団法人大阪国際経済振興センター、テレビ大阪株式会社、株式会社テレビ大阪エクスプロ	—
	第1回京都 FD 交流会	大学コンソーシアム京都	—
	TOEIC セミナー	一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	—
	第16回多文化共生のための国際理解教育開発教育セミナー	独立行政法人 国際協力機構 関西センター	—
	TOEIC Bridge Tests「英語指導法」ワークショップ	一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	天ヶ瀬葉子（薬学部）
	2019年度教育改革 FD / ICT 理事長・学長等会議 —AI（人工知能）社会に求められる大学教育を考える	公益社団法人 私立大学情報教育協会	飯田毅（学長）、若本夏美（教育開発支援センター長）、松崎正治（現代社会学部）、芝田信人（薬学部）
	平成31年度 FD 推進ワークショップ（新任専任教員向け） 大学教員の職能開発と FD	一般社団法人 日本私立連盟	—
	2019年度 FD 研修会「学生を授業に参加させる秘訣—アクティブラーニングの魅力—」	滋賀県立大学	—
9月	東京女子大学 AP シンポジウム —教育成果のアセスメントと改革	東京女子大学	西村公雄（生活科学部）
	2019年度 私情協 教育イノベーション大会	公益社団法人 私立大学情報教育協会	—

月	セミナー名・テーマ	主催	参加者
9月	TOEIC セミナー	一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会	—
	第16回「授業づくり」ワークショップ	大阪大学	—
10月	これからの数理データサイエンス教育を考える会	株式会社ベネッセコーポレーション	—
	武庫川学院創立80周年記念シンポジウム —女子大学の未来を拓く	武庫川女子大学	—
	2019年度教育改革事務部門 管理者会議	公益社団法人 私立大学情報教育協会	—
11月	第2回京都 FD 交流会	大学コンソーシアム京都	—
	令和元年 高知大学・大阪工業大学 AP 事業シンポジウム —学びの質保証に向けた教学マネジメント	高知大学・大阪工業大学	—
12月	地域別事業活動報告交流会	私立大学情報教育協会	—
	第5回ヨコハマ FD フォーラム	神奈川大学、関東学院大学、横浜国立大学、横浜市立大学	—
	第22回 関西大学 FD フォーラム —大学におけるライティング支援	関西大学	眞鍋 えみ子（看護学部）、和泉美枝（看護学部）
2月	分野連携グループによるアクティブ・ラーニング対話集会	公益社団法人 私立大学情報教育協会	—
	学教育再生加速プログラム（テーマⅡ）共同シンポジウム	日本福祉大学 AP 事業推進本部	—
	第17回「授業づくり」ワークショップ	大阪大学	天ヶ瀬葉子（薬学部）
	FD 合同研修プログラム・テーマ別研修 第6回「ケースメソッドを用いた成績評価のためのワークショップ」	大学コンソーシアム京都	—
	大学教員の企業現場研修	公益社団法人 私立大学情報教育協会	—
	第3回京都 FD 交流会	大学コンソーシアム京都	—
	2019年度 FD のための情報技術研究講習会	公益社団法人 私立大学情報教育協会	—
3月	第25回 FD フォーラム「主体的な大学のあり方を考える」 →新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い開催中止	大学コンソーシアム京都	教員23名、職員4名参加
	第26回大学教育研究フォーラム	京都大学	余田義彦（学芸学部）

FD レポート 第13号

2020年 3月 発行
同志社女子大学 教務部 教育開発支援センター
〒610-0395 京都府京田辺市興戸
TEL (0774) 65-8413 FAX (0774) 65-8418
E-mail : kyoiku-t@dwc.doshisha.ac.jp
ホームページ : <http://www.dwc.doshisha.ac.jp>

